

松山大学構内遺跡Ⅲ

—第4・5次調査—

1998

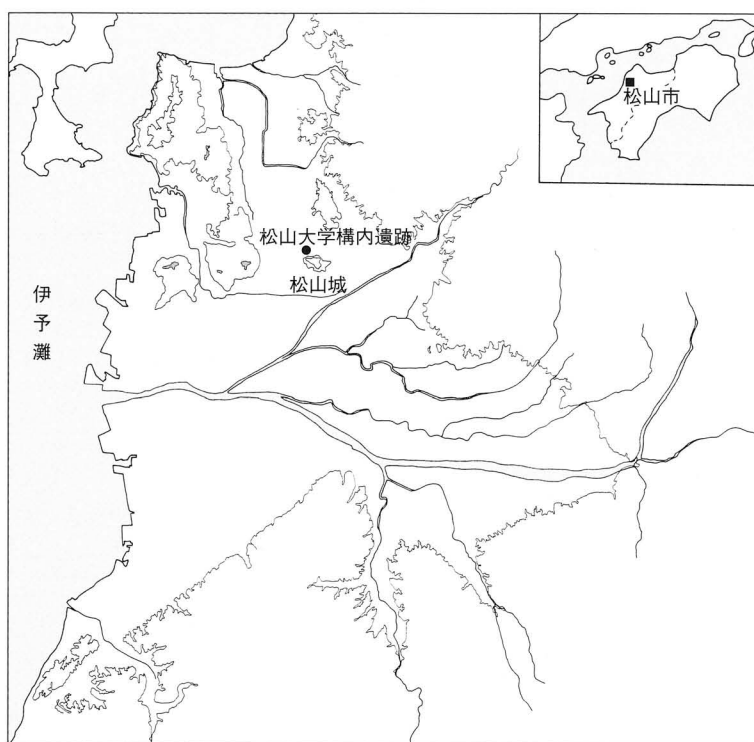
松山市教育委員会

(財)松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

松山大学構内遺跡Ⅲ

—第4・5次調査—



1998

松山市教育委員会

(財)松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



巻頭図版1 道後城北遺跡遠景（南より）

序

松山市は、古代より瀬戸内海航路の要地として、西日本地方の交通・交易に深く関わってきました。松山市のシンボル松山城の北には、愛媛県下を代表する弥生時代集落の道後城北遺跡群が展開しています。

松山大学構内遺跡は、文京遺跡と並び道後城北遺跡群の中央部に位置します。発掘調査は既に5次を数え、縄文時代晩期から中世までの複合遺跡であることが明らかになってきています。

今回の5次調査では、古墳時代から中世までの溝や自然流路が多数検出され、貿易陶磁器や弥生時代前期前半の土器も出土しています。これらは、松山大学構内に存在した古代集落の景観を復元する一つの資料になりました。

こうした成果は、松山大学関係各位の埋蔵文化財に対するご協力とご理解のたまものであり、厚くお礼を申し上げます。今後とも埋蔵文化財の発掘調査に対する一層のご協力をお願い申し上げます。

本書が、埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、文化財保護、生涯教育の向上に寄与できれば幸いです。

平成10年9月30日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長 田中誠一

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センターが、平成10年4月～同年9月に実施した、松山市文京町松山大学温山会館建設に伴う緊急調査の報告書である。
また、本書には平成6年6月の確認調査（4次調査）の報告と、関連資料として御幸遺跡を掲載している。
2. 遺構は呼称名を略号化して記述した。土坑：SK、溝：SD、自然流路：SR、井戸：SEである。
3. 遺物の実測・製図、遺構の製図は梅木謙一、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、大西陽子が行った。
4. 遺構図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。遺物図は、縄文土器・弥生土器・土師器は1／4、須恵器は1／3、石器は1／1・1／3を原則とした。なお、縮分値はスケール下に記した。
5. 本書に使用した方位は真北を基本とし、磁北の場合は方位記号に「磁北」を付記した。
6. 遺構の撮影は宮内慎一、水本完児、大西朋子が行い、遺物の撮影は大西朋子が担当した。
7. 科学分析では、株式会社 古環境研究所に分析と協力をいただいた。
8. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵・保管している。
9. 本書の執筆は、梅木謙一、宮内慎一、水本完児が分担執筆した。本書の浄書は、平岡直美が担当した。
10. 本書の編集は梅木謙一が行い、水口あをいの協力を得た。
11. 製版 カラー写真・写真図版—175線
印刷 オフセット印刷
用紙 カラー写真・本文 マットコート 110k
写真図版 マットコート 135k
製本 アジロ綴り

本文目次

第1章	はじめに	梅木	2	
	1. 調査に至る経緯	2. 刊行組織	3. 環境	
第2章	5次調査地	水本	7	
	1. 調査の経過	2. 層位	3. 遺構と遺物	4. 小結
第3章	4次調査地	宮内・梅木	33	
	1. 調査の経緯	2. 試掘調査	3. 小結	
第4章	自然科学分析	(株)古環境研究所		
	I 松山大学構内遺跡5次調査出土炭化材の樹種同定		38	
	II 松山大学構内遺跡5次調査における放射性炭素年代測定		40	
第5章	調査の成果と課題	梅木	41	
附編 I	御幸遺跡	水本	43	
写真図版		大西・宮内・水本		

挿 図 目 次

第1章 はじめに

第1図 調査地位置図 (縮尺1/1,200)	3
第2図 調査地周辺の遺跡分布図 (縮尺1/10,000)	5

第2章 5次調査地

第3図 調査地位置図 (縮尺1/600)	8
第4図 東・西壁土層図 (縮尺1/60)	10
第5図 北壁土層図 (縮尺1/60)	11
第6図 南壁土層図 (縮尺1/60)	12
第7図 第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層上面検出遺構配置図 (縮尺1/100)	13
第8図 第Ⅸ層上面検出遺構配置図 (縮尺1/100)	14
第9図 SK1測量図 (縮尺1/40)	15
第10図 第Ⅶ層上面検出遺構測量図 (縮尺1/40)	17
第11図 第Ⅶ層上面検出遺構出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/4)	18
第12図 第Ⅷ・Ⅸ層上面検出遺構測量図・出土遺物実測図 (縮尺1/40・1/3・1/4)	19
第13図 第Ⅸ層上面検出遺構測量図 (縮尺1/40)	20
第14図 第Ⅸ層上面検出遺構出土遺物実測図 (SR4)(1) (縮尺1/4)	21
第15図 第Ⅸ層上面検出遺構出土遺物実測図 (SR4)(2) (縮尺1/2・1/3・1/4)	22
第16図 第Ⅸ層上面検出遺構測量図 (縮尺1/40)	23
第17図 包含層ほか出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3・1/4)	27

第3章 4次調査地

第18図 遺構配置図 (縮尺1/100)	34
第19図 土層図 (縮尺1/40)	35

第4章 自然科学分析

第20図 出土材の顕微鏡写真	39
第21図 第Ⅸ層上面検出の焼土遺構	

附編 御幸遺跡

第22図 調査地位置図 (縮尺1/5,000)	44
第23図 調査地測量図 (縮尺1/300)	
第24図 北・東壁土層図 (縮尺1/60)	45
第25図 検出遺構と遺物 (縮尺1/200)	47
第26図 包含層出土遺物実測図 (縮尺1/3)	48

表 目 次

第1章 はじめに	
表1 調査地一覧	3
第2章 5次調査地	
表2 土坑一覧	28
表3 溝一覧	
表4 自然流路一覧	
表5 第Ⅶ層上面検出遺構出土遺物観察表（土製品）	29
表6 S D 8 出土遺物観察表（土製品）	30
表7 S R 3 出土遺物観察表（石製品）	
表8 S R 4 出土遺物観察表（土製品・石製品）	
表9 包含層ほか出土遺物観察表（土製品・石製品）	32
第3章 4次調査地	
表10 自然流路一覧	37
附編 御幸遺跡	
表11 井戸一覧	49
表12 包含層出土遺物観察表（土製品）	50

写 真 図 版 目 次

巻頭図版1. 道後城北遺跡遠景（南より）	
第2章 5次調査地	
図版1. 1 調査地遠景（南より）	2 調査地周辺（東より）
3 調査地近景（西より）	
図版2. 1 第Ⅶ層上面遺構完掘状況①（東より）	
図版3. 1 第Ⅶ層上面遺構完掘状況②（北より）	2 第Ⅶ層上面遺構完掘状況③（東より）
図版4. 1 西壁土層（東より）	2 北壁土層（南より）
3 東壁土層（西より）	
図版5. 1 S R 2 遺物出土状況（北より）	2 S R 4 遺物出土状況①（南より）
3 S R 4 遺物出土状況②（北より）	
図版6. 1 S R 2・4 出土遺物	
図版7. 1 S R 3・4 出土遺物・包含層出土遺物・近現代坑出土遺物	
第3章 4次調査地	
図版8. 1 完掘状況（北より）	2 S R 1 完掘状況（西より）
3 西壁土層（東より）	
附編 御幸遺跡	
図版9. 1 A区完掘状況①（北より）	
図版10. 1 A区完掘状況②（西より）	2 B区完掘状況（東より）
3 C区完掘状況（西より）	
図版11. 1 D区完掘状況（東より）	2 S E 1 完掘状況（北より）

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

松山大学は、松山平野北部、松山城の北側に位置する。松山大学を含む松山城の北側は、道後城北地区と呼称され、同地区には文京遺跡や持田遺跡など縄文時代から中・近世までの遺跡が多数存在している。特に、弥生時代と中世末期には平野を代表する遺跡が展開する。

松山大学構内は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No67 樋又（元練兵場）遺物包含地（文京遺跡）』内にあり、1987（昭和62）年以降現在までに5回にわたる調査を実施してきた。

1次調査は、1987（昭和62）年11月に構内北東部の7号館建設に際し行われ、弥生時代と中世の遺物包含層を検出している。

2次調査は、1989（平成元）年11月に構内北西部の8号館建設に際し行われ、弥生時代～古墳時代の竪穴式住居址16棟を含む集落関連遺構と遺物を多数検出した。

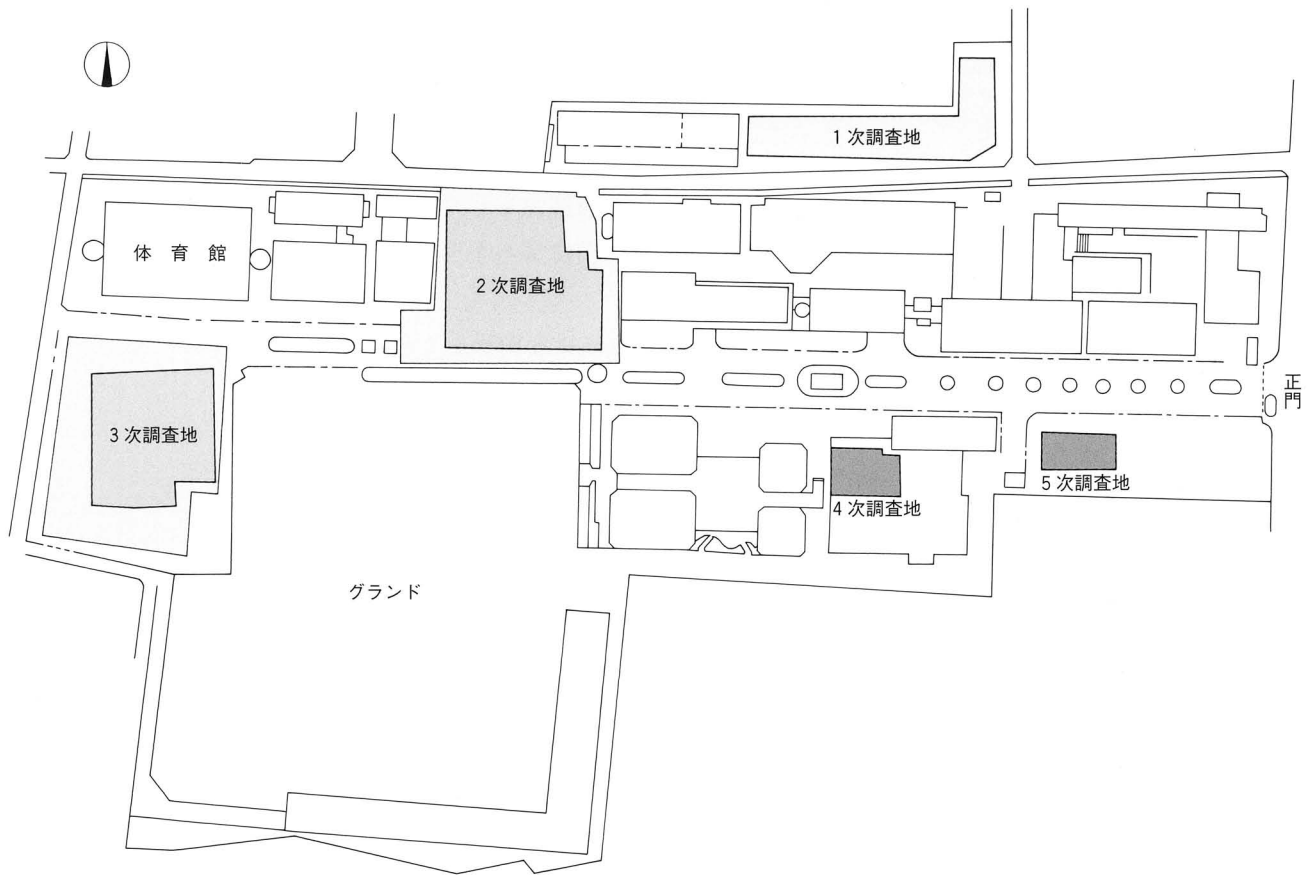
3次調査は、1992（平成4）年11月に構内西部の厚生会館建設の際に行われ、弥生時代～古代の住居址と多数の遺構・遺物を検出した。

4・5次調査は、今回報告するもので、4次は1994（平成6）年6月の試掘調査、5次調査は1998（平成10）年4月に行った本格調査である。両調査は、過去の調査資料より、遺跡の存在が確実な地域であったため、順次立会調査、試掘調査、本格調査を進めたものである。

なお、4次調査は構内北東部の図書館書庫建設に伴う調査、5次調査は図書館東隣りの温山会館建設に伴う調査である。

2. 調査・刊行組織（平成10年9月30日現在）

松山市教育委員会	教 育 長	池田 尚郷
事 務 局	局 長	大野 嘉幸
	次 長	岩本 一夫
	次 長	丹下 正勝
文 化 教 育 課	課 長	松平 泰定
(財)松山市生涯学習振興財団	理 事 長	田中 誠一
	事 務 局 長	池田 秀雄
	事 務 局 次 長	河口 雄三
埋蔵文化財センター	所 長	河口 雄三
	次 長	田所 延行
	調 査 係 長	田城 武志
	調 査 主 任	栗田 正芳（文化教育課職員）
	調 査 員	梅木 謙一
		宮内 慎一
		水本 完児
		大西 朋子



第1図 調査地位置図 (S=1:1,200)

表1 調査地一覧

調査回数	所在地	面積(m ²)	調査期間	調査
1次調査	7号館		1987(昭和62)年11月	確認
2次調査	8号館	2,300	野外 1989(平成元)年11月26日～ 1990(平成2)年2月28日 室内 1990(平成2)年3月1日～ 同年8月31日	本格
3次調査	厚生会館	1,600	野外 1992(平成4)年11月2日～ 1993(平成5)年5月15日 室内 1993(平成5)年5月17日～ 1994(平成6)年3月31日	本格
4次調査	図書館書庫	372	1994(平成6)年6月20日～同年6月30日	確認
5次調査	温山会館	315	野外 1998(平成10)年4月3日～ 同年6月30日 室内 1998(平成10)年7月1日～ 同年9月30日	本格

3. 環境 (第2図)

(1) 立地

松山平野は、高縄半島の南西部にあり、高縄半島と四国山地に源を発した大小の河川により形成された沖積平野である。松山大学は、平野北部の松山城（勝山もしくは城山）の北側にあり、丸山川や樋又川が大学の北側を流れている。また、縄文後期以前には石手川が勝山の北を流れていたことが知られている。

遺跡は、これ等の中・小河川により形成された微高地に展開することになる。

(2) 歴史的環境

松山大学を含む松山城北部域は、道後城北地区と称され、文京遺跡や道後湯月城をはじめとし、松山平野の主要な遺跡が展開している。

旧先土器時代

祝谷丸山遺跡採集資料があげられる。細石核や細石刃が出土し、多田 仁氏（多田 仁 1992）により詳細な検討がなされている。

縄文時代

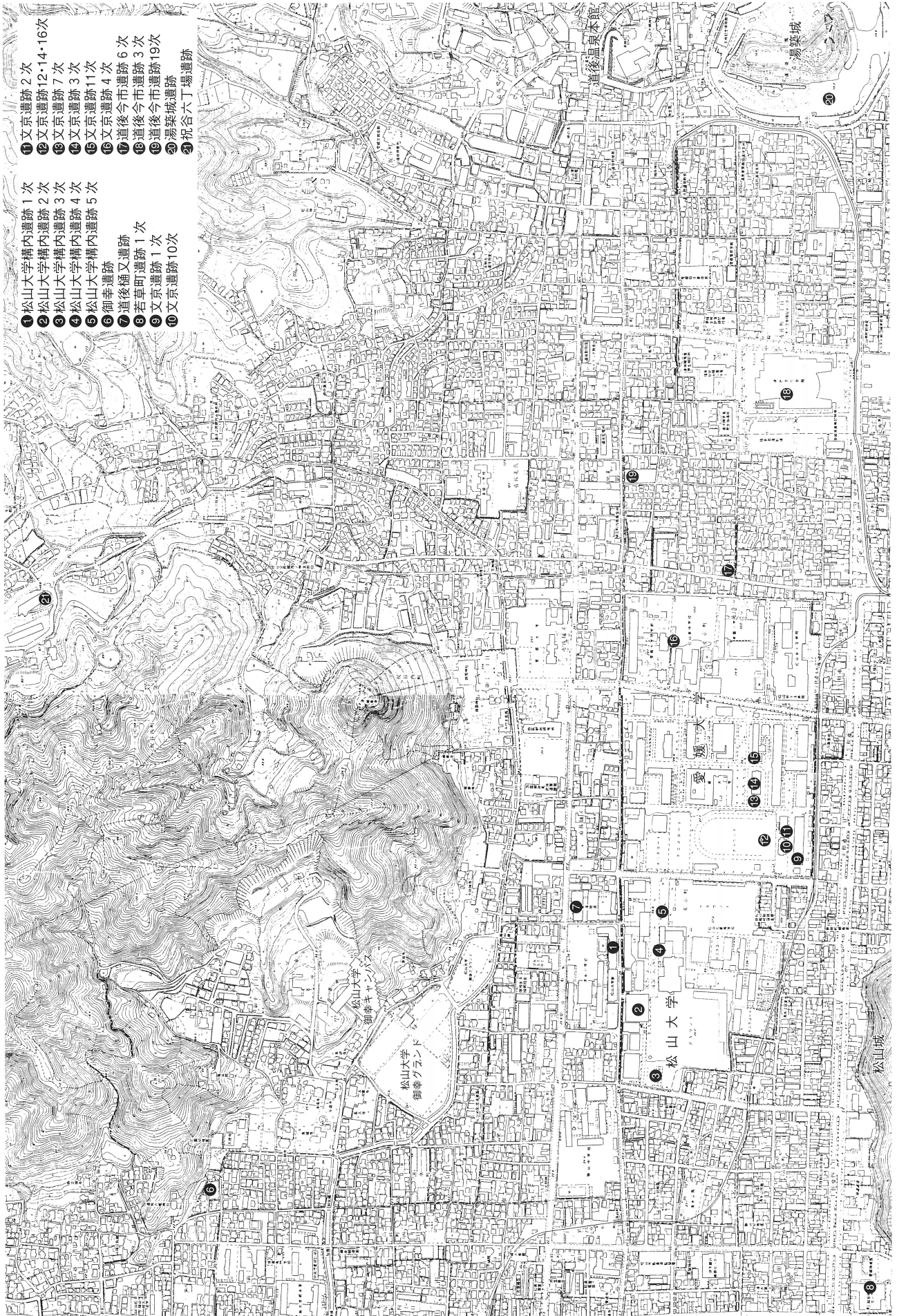
縄文時代中期の土器片が1点、東中学校構内（文京遺跡4次調査）から出土している。この資料が道後城北地区で最も古い縄文土器資料となる。後期は、文京遺跡11次調査（宮本一夫 1990）や道後樋又遺跡（南海放送遺跡 西尾幸則 1989）で土器や焼土が検出され、居住域としての機能をはたしていた地域と考えられる。晩期は、道後今市遺跡10次調査地（多田・湖西ほか 1994）で土坑と共に土器も出土し、集落の一端がうかがえる。この時期に、遺跡数が増加する。

弥生時代

前期：松山東中学校構内（文京遺跡 栗田茂敏 1992）からは前半の円形竪穴式住居址2棟が検出されている。平野で最も古い弥生時代の竪穴式住居址である。後半は、持田町三丁目遺跡（真鍋昭文 1995）で墓が多数検出され、なかには磨製石剣や石鏃、管玉を副葬する墓もある。前期末～中期初頭には、大溝や多数の土坑をもつ岩崎遺跡（宮内慎一 1998）がある。

中期：前半には山手の祝谷六丁場遺跡（宮崎泰好 1991）で、多量の土器と石器が出土している。土製品には分銅形土製品を10点余り、石器には石戈1点を含んでおり、松山平野の重要遺跡といえる。後半は、愛媛大学構内を中心に展開する文京遺跡（愛媛大学埋蔵文化財調査室 1998）がある。文京遺跡は、これまでに10数回の調査がなされ、後期前半まで松山平野の中心的遺跡となる。遺跡には大型円形住居址、大型掘立柱建物址、周溝状遺構、遺物には青銅鏡、鉄器、ガラス滓などがある。

後期：松山大学構内で遺跡が展開する時期で、竪穴式住居址や朱に関する石器（石杵）などが出土している（梅木 1991、宮内 1995）。終末期には、勝山（城山）の西麓に墳丘墓や周溝墓が造営される（若草町遺跡 相原 1994、土井 1996）。若草町遺跡では、直径20数mの円形周溝が検出され、溝からは多量の土器が出土し、山陰や近畿等の県外資料が含まれている。



第2図 調査地周辺の遺跡分布図 (S=1:10,000)

古墳時代

集落は5世紀代が松山大学構内、6世紀代は愛媛大学構内に竪穴式住居址が多数検出される。古墳は、北及び東の山手に造営され、7世紀代までの古墳が確認されている。このうち7世紀の瀬戸風峠4号墳（相原浩二 1997）からは横穴式石室内の奥壁に近い場所から、炭が多量に発見された。炭の上からは人骨が出土したが、人骨は火をうけた様子はなく、炭を敷いた後に埋葬されたことが明らかになっている。

古代

道後に白鳳期の湯ノ町廃寺と内代廃寺（吉本 拓 1986）がある。岩崎遺跡の調査では、南北にはしる溝と土師器、さらには土馬が出土している。

中世

道後温泉に隣接する愛媛県立道後公園には、14世紀築造の湯築城址がある。調査の結果、中世から近世への移行期の城郭研究にとっては一級の資料であることが確認されている。

以上、松山大学一帯の遺跡について簡単に触れたが、各時代において平野でも主要な遺跡が一带に展開しているのである。なお、記述の遺跡は近年に調査されたものが多く、報告の刊行が待たれる。

〔文献〕

- 多田 仁 1992 「松山平野の石器文化」『祝谷アイリ遺跡』（財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター）
- 宮本一夫 1990 『文京遺跡第8・9・11次調査』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 西尾幸則 1989 「道後城北RNB遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- 多田 仁・湖西一成・林 奈美 1994 『道後今市遺跡X』（財愛媛県埋蔵文化財調査センター）
- 栗田茂敏 1992 『文京遺跡－第2・3・5次調査－』愛媛大学・（財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター）
- 真鍋昭文 1995 『持田町3丁目遺跡』（財愛媛県埋蔵文化財調査センター）
- 宮内慎一 1998 「岩崎遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報X』松山市教育委員会・（財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター）
- 宮崎泰好 1991 『祝谷六丁遺跡』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 愛媛大学埋蔵文化財調査室 1998 『文京遺跡シンポジウム・資料集』
- 梅木謙一 1991 『松山大学構内遺跡－第2次調査－』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 宮内慎一 1995 『松山大学構内遺跡Ⅱ－第3次調査－』松山市教育委員会・（財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター）
- 相原浩二 1994 「若草町遺跡3次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』松山市教育委員会・（財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター）
- 土井光一郎・伊藤祐三 1996 『若草町遺跡Ⅱ』（財愛媛県埋蔵文化財調査センター）
- 相原浩二 1997 「瀬戸風峠古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・（財松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター）
- 吉本 拓 1986 「湯ノ町廃寺」「内代廃寺」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会

第2章 5次調査地

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1997（平成9）年7月、学校法人松山大学（理事長 比嘉清松氏）より、大学構内（松山市文京町4番地2）において温山会館を建設するにあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No67 樋又（元練兵場）遺物包含地（文京遺跡）』内にある。大学とその一帯は縄文時代後期から古墳時代までの集落関連遺構が多数確認されており、特に弥生時代の松山平野においては主要な集落地帯であったことが近年の調査で明らかになってきている。

松山大学構内では、松山市教育委員会と（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターにより、これまで4度にわたる発掘調査（試掘調査を含む）が実施されている。その結果、大学構内には弥生時代から中世までの集落が存在していることが明らかになってきている。

このことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認する必要があるため、1998（平成10）年3月24・25日に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査では、4本のトレンチを設定し、5つの土層を検出した。それらは、第1層表土、第2層オリーブ褐色土、第3層黄褐色土、第4層鈍い黄色土、第5層明黄褐色土である。第4層からは土師器や須恵器が出土した。遺構は、柱穴1基と流路と思われる砂礫層を検出した。

これらの結果を受け、文化教育課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を重ね、建物建設に伴って消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は、弥生時代～古墳時代の集落構造解明を主目的とし、文化教育課の指導のもと、（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、1998（平成10）年4月3日より本格調査を実施した。

(2) 調査の経緯

調査は、4月3日から6月30日までは野外調査、7月1日から9月30日までは室内調査となる。以下、調査工程を略記する。

1998（平成10）年4月6日、調査区を設定し、調査を開始する。重機で第Ⅷ層上面までを掘削し、4月9日に終了する。4月10日、遺構の検出を開始し、5月26日に遺構の検出を終了する。5月27日、遺構の検出写真を撮る。5月27日、遺構の掘り下げを開始し、6月11日に掘り下げを終了する。6月12日、高所作業車を用いて、遺構の完掘状況の写真を撮る。6月15日、遺構の測量を開始し、6月19日に測量を終了する。6月22日、重機で第Ⅷ層を掘削し、6月23日に終了する。6月24日、遺構の検出と掘り下げを開始する。6月25日に遺構の掘り下げを終了する。6月26日、遺構の測量を開始し、6月27日に終了する。6月29日、道具片付けを開始し、6月30日に道具を撤去して、野外調査を終了する。7月1日～9月30日、松山市埋蔵文化財センターにて測量図や出土物の整理を行い、報告書を作成する。



第3図 調査地位置図 (S=1:600)

(3) 調査組織

遺跡名 松山大学構内遺跡5次調査地
調査場所 松山市文京町4番地2
調査期間 野外：1998（平成10）年4月3日～同年6月30日
屋内：1998（平成10）年7月1日～同年9月30日
調査面積 315m²
調査主体 (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
調査委託 学校法人松山大学理事長 比嘉清松
調査担当 梅木謙一・水本完児

2. 層位（第4～6図）

調査地は、松山平野の中央部、標高26.9mに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層茶灰色土、第Ⅲ層灰褐色土、第Ⅳ層褐色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層淡い茶色粘土、第Ⅶ層明黄色シルト、第Ⅷ層黒褐色シルト、第Ⅸ層暗黄色シルト、第Ⅹ層砂礫層である。

第Ⅰ層は造成土で、厚さ15～95cmを測る。調査区全域で検出した。

第Ⅱ層は茶灰色土で、厚さ2～130cmを測る。調査区全域で検出した。

第Ⅲ層は灰褐色土で、厚さ5～25cmを測る。調査区西部、南～南東部、北西部で検出した。弥生土器、須恵器、土師器が出土する。中世の耕作土で、4次調査地の第Ⅲ層となる。

第Ⅳ層は褐色土で、混入土壌の差によって3つに分層される。4次調査地の第Ⅳ層になり、4次調査では須恵器と土師器が出土しており、中世の床土となる。

第Ⅳ-1層は褐色土に灰色の砂が混じるもので、厚さ2～20cmを測る。調査区北～北東部にある。

第Ⅳ-2層は褐色土に黄色土が混じるもので、厚さ2～15cmを測る。調査区北部、西部、北東部、南～南東部で検出した。

第Ⅳ-3層は褐色土に灰色土が混じるもので、厚さ3～20cmを測る。調査区東部、南～南東部で検出した。

第Ⅴ層は黒褐色土で、混入土壌の差によって3つに分層される。

第Ⅴ-1層は黒褐色土で、厚さ8～30cmを測る。調査区西部、北西部、北東部で検出した。弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層である。

第Ⅴ-2層は黒褐色土に茶色土が混じるもので、厚さ2～10cmを測る。調査区南～南東部にある。

第Ⅴ-3層は黒褐色土に砂が混じるもので、厚さ3～25cmを測る。調査区北部で検出した。

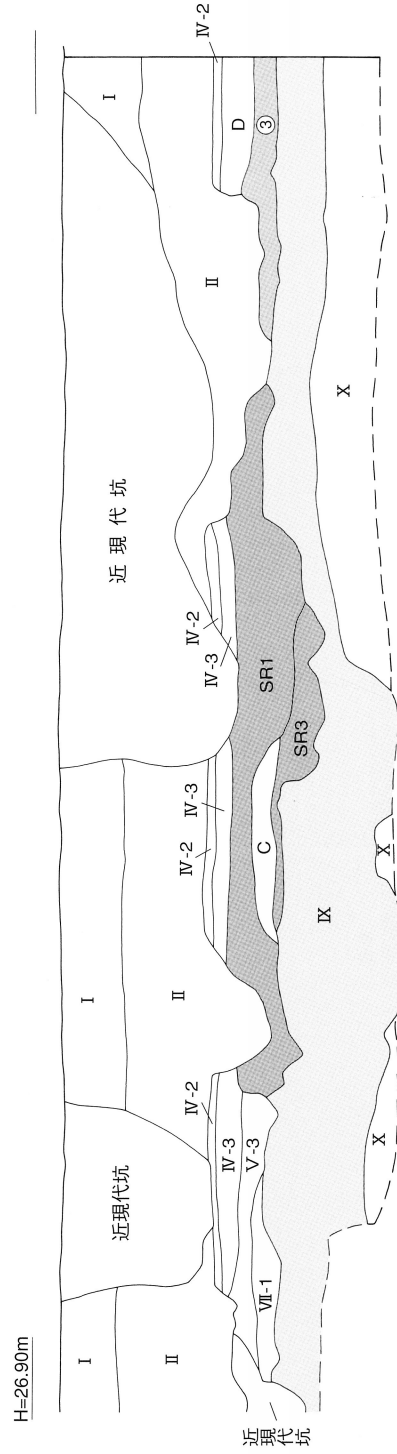
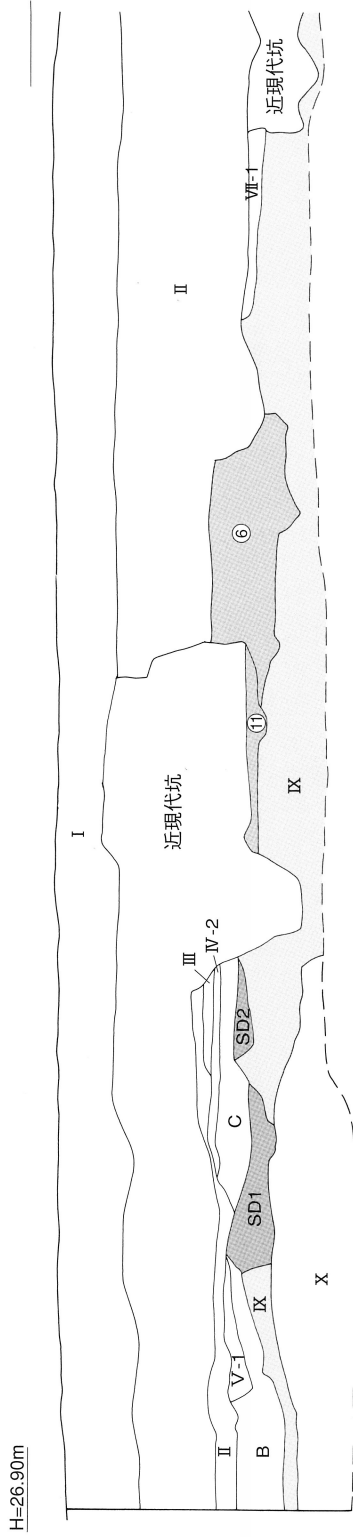
第Ⅵ層は淡い茶色粘土で、混入土壌の差によって2つに分層される。

第Ⅵ-1層は淡い茶色粘土で、厚さ5～45cmを測る。調査区西部、南西部、南～南東部で検出した。

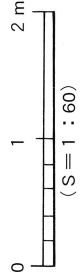
第Ⅵ-2層は淡い茶色粘土に礫が混じるもので、厚さ5～40cmを測る。調査区南～南西部にかけて検出した。

第Ⅶ層は明黄色シルトで、混入土壌の差によって2つに分層される。

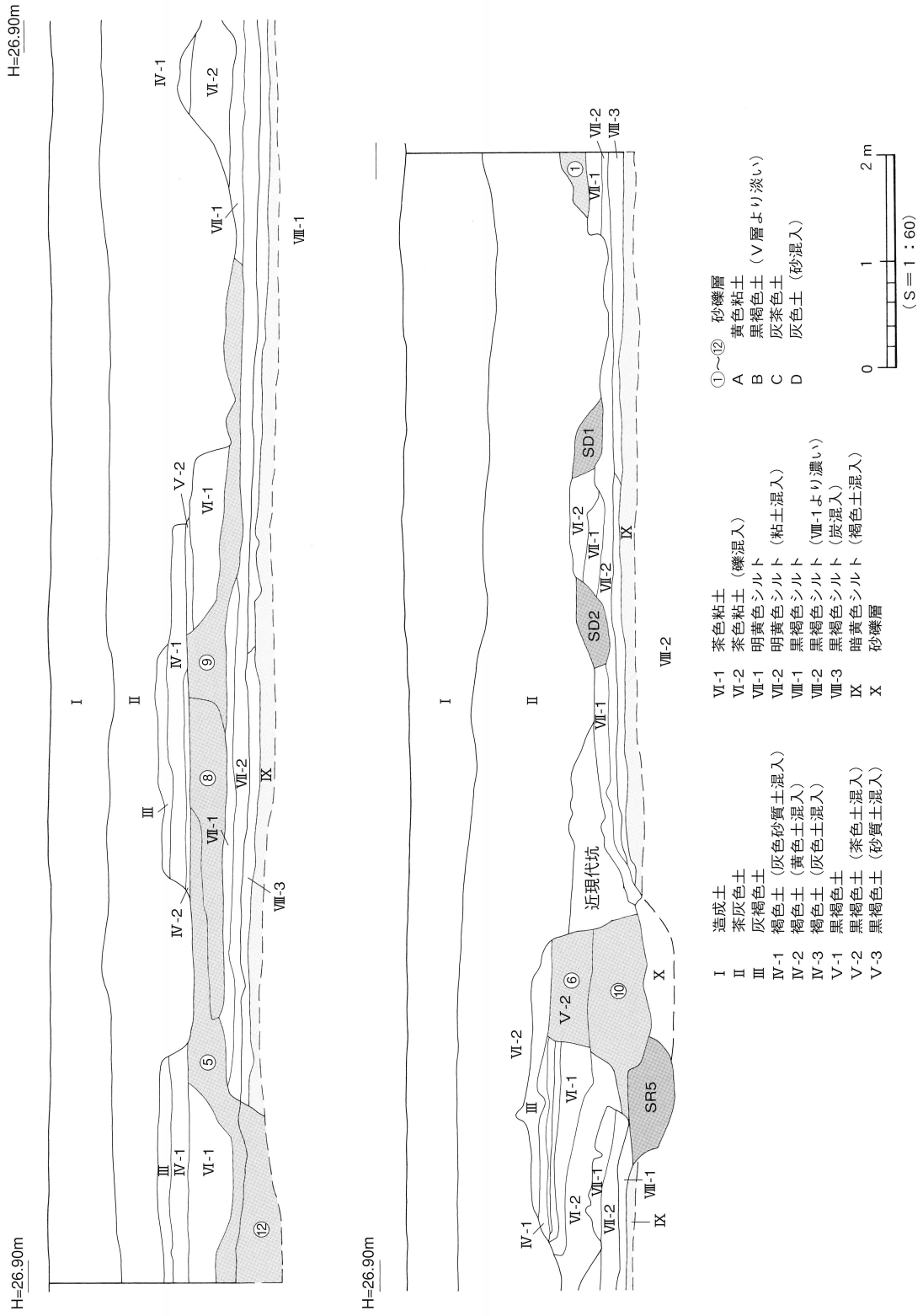
第Ⅶ-1層は明黄色シルトで、厚さ2～20cmを測る。調査区南全域、南西部、北部で検出した。遺物は上面で石庖丁が出土した。



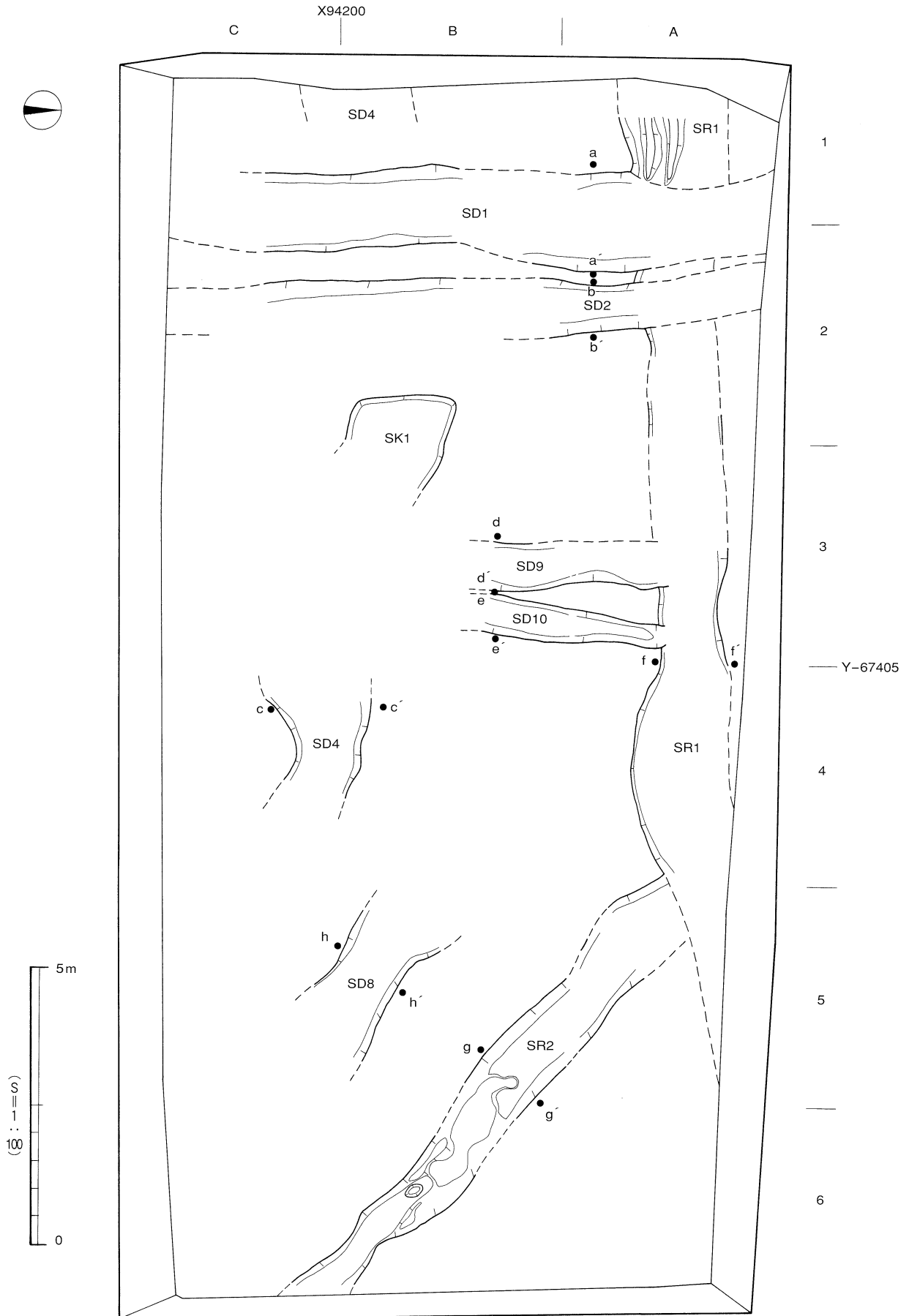
- | | | | |
|------|---------------|----------------------------|-----------------|
| I | 造成土 | 茶色粘土 (礫混入) | ①~② 砂礫層 |
| II | 茶灰色土 | VI-1 茶色粘土 (礫混入) | A 黄色粘土 |
| III | 灰褐色土 | VI-2 茶色シルト (礫混入) | B 黒褐色土 (V層より淡い) |
| IV-1 | 褐色土 (灰色砂質土混入) | VII-1 明黄色シルト (粘土混入) | C 灰茶色土 |
| IV-2 | 褐色土 (黄色土混入) | VII-2 黒褐色シルト (粘土混入) | D 灰土 (砂混入) |
| IV-3 | 褐色土 (灰色土混入) | VIII-1 黒褐色シルト (VIII-1より濃い) | |
| V-1 | 黒褐色土 | VIII-2 黒褐色シルト (炭混入) | |
| V-2 | 黒褐色土 (茶色土混入) | VIII-3 暗黄色シルト (褐色土混入) | |
| V-3 | 黒褐色土 (砂質土混入) | IX 暗黄色シルト (褐色土混入) | |
| | | X 砂礫層 | |



第5図 北壁土層図

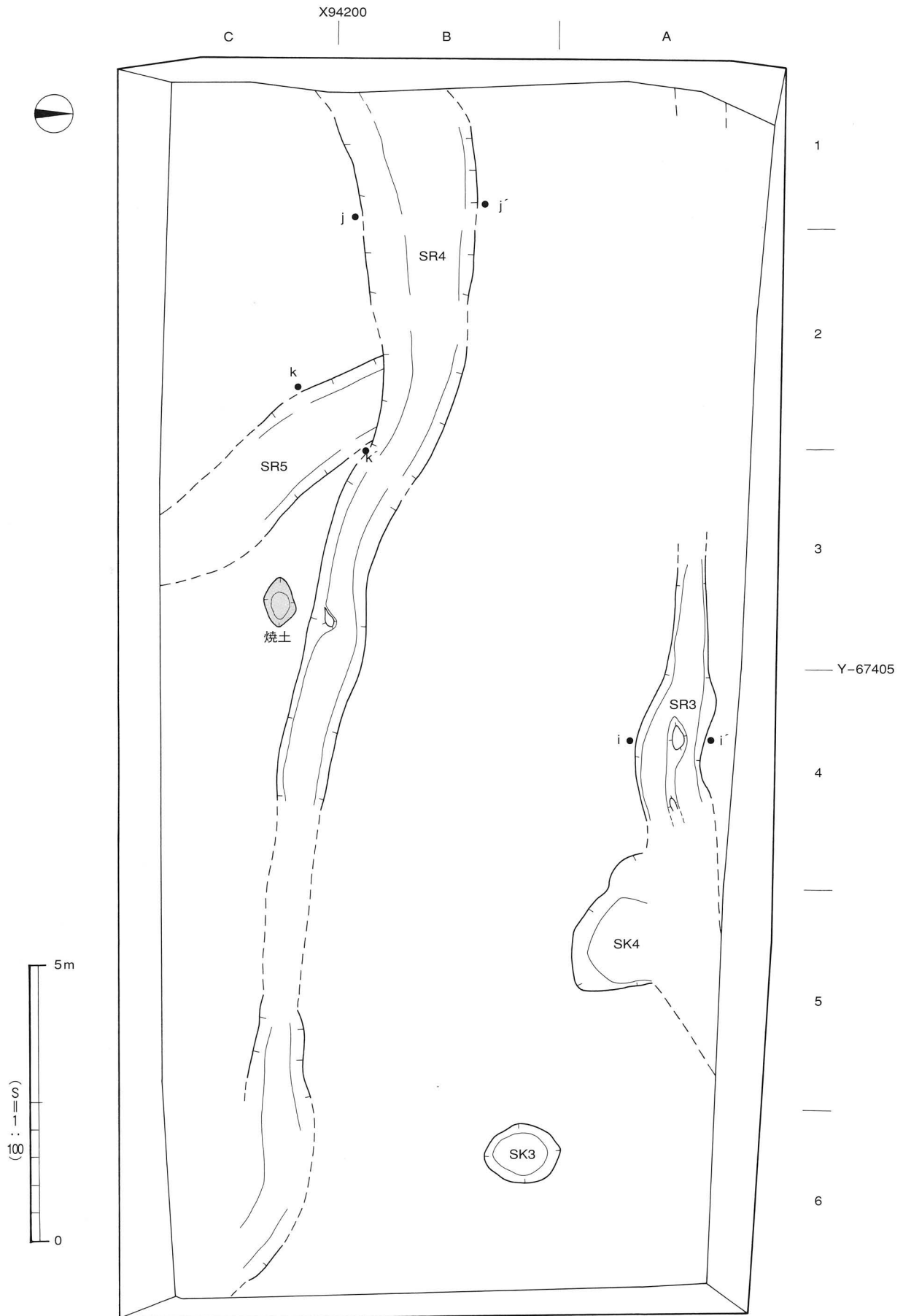


第 6 図 南壁土層図



第7図 第VI・VII・VIII層上面検出遺構配置図

5 次 調 査 地



第 8 図 第Ⅸ層上面検出遺構配置図

第Ⅶ-2層は明黄色シルトに粘土が混じるもので、厚さ2~20cmを測る。調査区南全域、南東部、南西部で検出した。

第Ⅷ層は黒褐色シルトで、混入土壌の差によって3つに分層される。

第Ⅷ-1層は黒褐色シルトで、厚さ2~25cmを測る。調査区東部、南西部、北西部で検出した。

第Ⅷ-2層は第Ⅷ-1層より色が濃いもので、厚さ2~10cmを測る。調査区南西部で検出した。

第Ⅷ-3層は黒褐色シルトに炭が混じるもので、厚さ5~15cmを測る。調査区南部で検出した。

第Ⅸ層は暗黄色シルトに褐色土が混じるもので、厚さ2~100cmを測る。調査区全域で検出した。調査区北壁トレンチ中央部からは土器片の細片が1点(縄文土器か)出土した。

第Ⅹ層は砂礫層である。上面の検出にとどまる。

遺構は、第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層で検出した。

なお、第Ⅷ層以上は重機で掘削したため、第Ⅷ層以上にある砂礫層は土層壁だけの検出にとどまった。これらの砂礫層は砂礫①~⑫として土層図に記載した。また、部分的に検出した土壌はA~Dとし土層図に掲載している。

3. 遺構と遺物

本調査では、縄文時代、古墳時代~古代、中・近世の遺構と、縄文時代~中世の遺物を確認した。遺構は、溝(SD)6条、自然流路(SR)5条、土坑(SK)3基、焼土1基を検出している。以下、検出層位ごとに遺構の記述を行う。

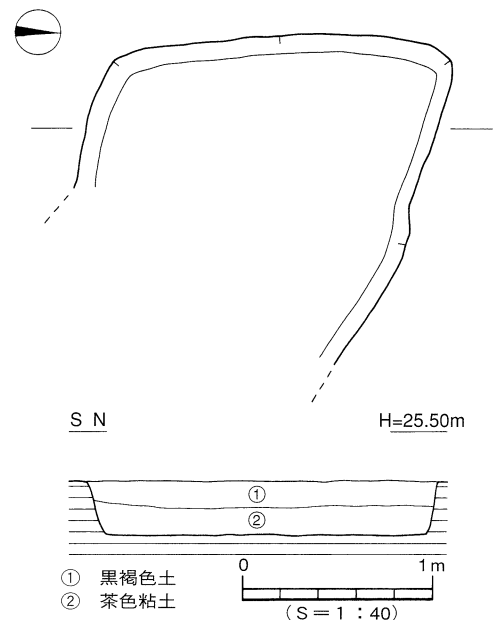
(1) 第Ⅵ層上面検出遺構(第7図)

第Ⅵ層上面では土坑1基(SK1)を検出した。

SK1

SK1は、調査区中央西側B2・B3区にて検出した。SK1の東側は近現代坑に切られて消失している。平面形態は方形で、規模は東西検出長1.7m、南北1.9m、深さ5~30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は上層が黒褐色土、下層が茶色粘土である。遺物は、上層下部から弥生土器が出土した。

時期：検出層位より中~近世とする。



第9図 SK1測量図

(2) 第Ⅶ層上面検出遺構(第7・10図)

第Ⅶ層上面では溝5条(SD1・2・4・9・10)と自然流路2条(SR1・2)を検出した。

SD1

SD1は、調査区西側A1~C2区にて検出した。SD1はSR1を切っている。規模は全長7.0m、幅1.5~1.8m、深さ5~35cmを測る。断面形態は凸レンズ状を呈し、埋土は灰褐色粘土に小さい礫が混じるものである。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

S D 2

S D 2 は、調査区西側 A 2 ～ C 2 区にて検出した。S D 2 は S R 1 を切っている。規模は全長 6.6 m、幅 90～100cm、深さ 5～30cm を測る。断面形態は凸レンズ状を呈し、埋土は灰褐色土に礫が混じるものである。出土遺物は、中世の土師器と弥生土器がある。

出土遺物（第11図）

1 は中世土師器の椀である。底部には高台がつく。12世紀。

時期：出土遺物より12世紀とする。

S D 4

S D 4 は、調査区中央南 B 4 ・ C 4 区と西壁土層にて検出した。規模は全長 1.6m、幅 1.1～1.8m、深さ 20～30cm を測る。断面形態は凸レンズ状を呈し、埋土は灰色土に礫が混じるものである。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

S D 9

S D 9 は、調査区中央北側 A 3 ～ B 3 区にて検出した。S D 9 は S R 1 を切っている。規模は全長 3 m、幅 80～90cm、深さ 10～35cm を測る。断面形態は凸レンズ状を呈し、埋土は灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

S D 10

S D 10 は、調査区中央北側 A 3 ～ B 3 区にて検出した。S D 10 は S R 1 を切る。規模は全長 3.1 m、幅 40～70cm、深さ 7～30cm を測る。断面形態は凸レンズ状を呈し、埋土は灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

S R 1

S R 1 は、調査区北西部～北東部 A 1 ～ A 4 区にて検出した。S R 1 は S D 1 ・ 2 ・ 9 ・ 10 に切られ、S R 2 を切る。規模は全長 13.7m、幅 1.2m、深さ 30～55cm を測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は上層が灰色砂質土で、下層は灰色砂質土に礫が混じるもので、厚さ 15～30cm を測る。出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器がある。

出土遺物（第11図）

2 ・ 3 は中世の土師器である。2 は三足土釜の脚部である。13～16世紀。3 は土師器の皿である。底部は平底で、回転糸切り痕がみられる。15～16世紀。

4 ～14 は古墳時代～古代の土器である。4 は土師器の坏である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。底部は平底である。7世紀前半～中葉。5 ～14 は須恵器で、5 ～7 は坏蓋である。5 は小片で、天井部と口縁部の境界には断面三角形の稜をもつ。口縁部は直立気味に下がり、口縁端

部は内傾する。5世紀末～6世紀初頭。6は天井部からなだらかな弧を描いて下がり、口縁部は直立気味に立ち上がる。7世紀前半。7は口縁部がなだらかに下がり、やや内湾する。7世紀前半。8・9は坏身である。たちあがりは内傾し、受部は上外方にのびる。8は6世紀前半、9は7世紀前半。10～12は坏である。10は坏身なし坏蓋で、口縁部はやや内湾する。7世紀前半。11・12は口縁部が外反するもので、11の体部は直線的にたちあがり、12の体部は内湾気味にたちあがる。7世紀後半。13・14は甕である。13は口縁部が外反し、口縁端部は平坦面をなす。口縁外面には斜め方向の凹線がある。6世紀。14の口縁端部は内湾し、端部は小さく垂下する。7世紀前半。

15～17は弥生土器である。15は甕形土器で口縁部は外反し、口縁端面には刻目がある。弥生前期。16は甕形土器の底部で、くびれの上げ底である。弥生中期後半。17はジョッキ形土器の把手の一部である。弥生時代後期～後期前半。

18は縄文時代晩期の壺形土器で、口縁部は短く外反する。

時期：検出層位より中世とする。

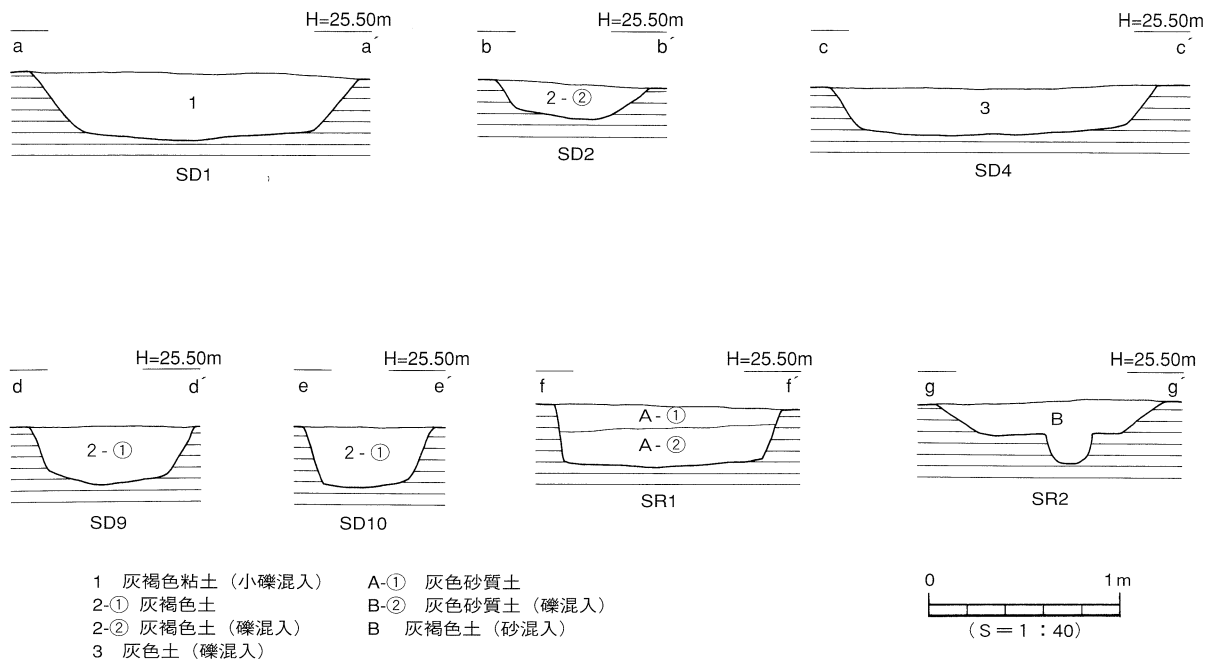
SR2

SR2は、調査区北東部～南東部A4～C6区にかけて検出した。SR2はSR1に切られる。規模は全長10m、幅50～120cm、深さ10～30cmを測る。断面形態は凸レンズ状を呈し、埋土は灰褐色土に砂が混じるものである。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器の平瓶、陶磁器がある。

出土遺物（第11図、図版6）

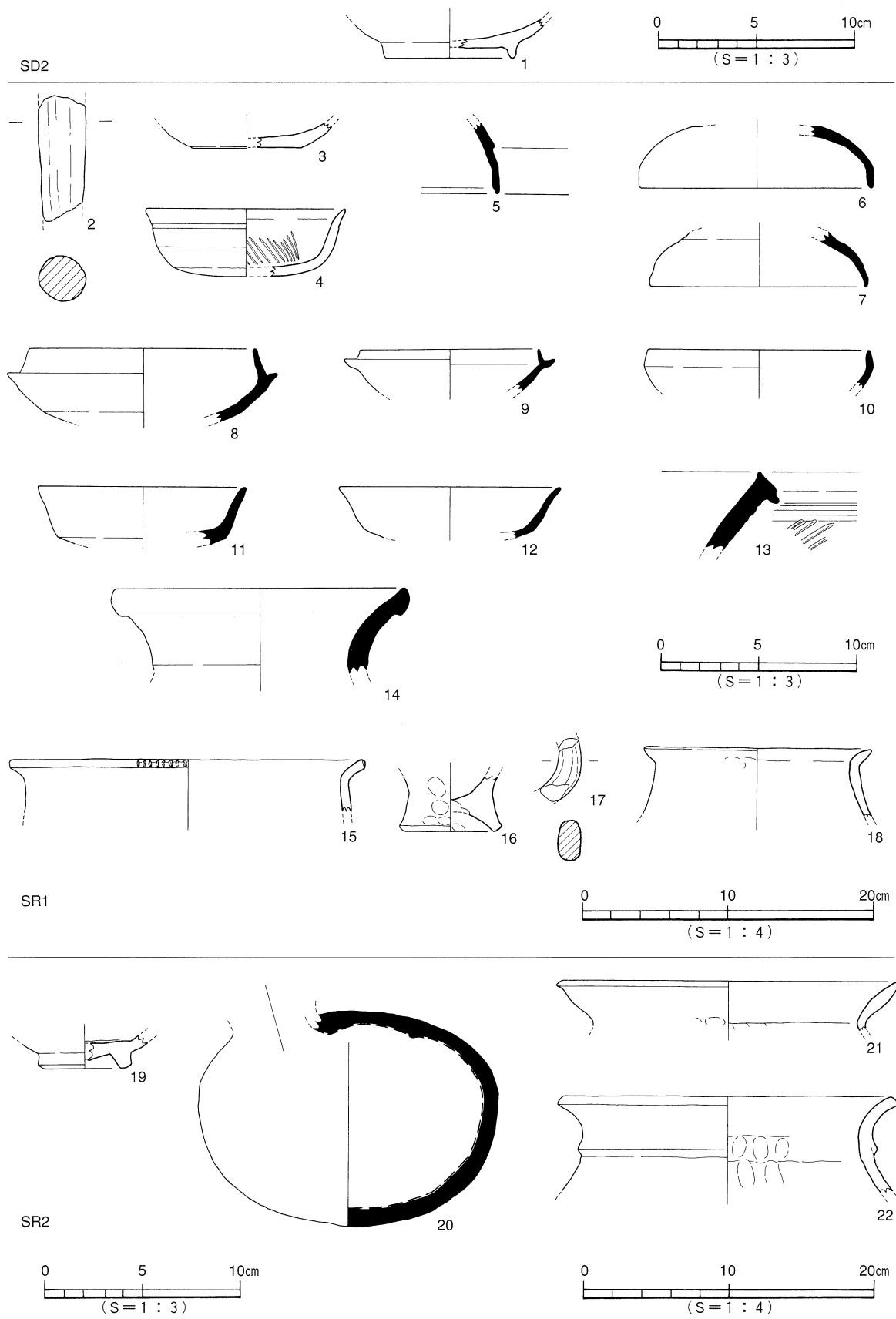
19は同安窯系の青磁碗である。13世紀。20は須恵器の平瓶で、口縁部は欠損するが、胴部はほぼ完形品となる。丸みをおびた扁平球の体部である。7世紀後半。21は土師器の甕で、口縁端部は面をなす。5～6世紀。22は弥生土器の壺形土器である。口縁部は外反し、口縁部境は段をなす。弥生前期。

時期：検出層位より、中世とする。



第10図 第VII層上面検出遺構測量図

5 次 調 査 地



第11図 第Ⅶ層上面検出遺構出土遺物実測図 (SD2・SR1・2)

(3) 第Ⅷ層上面検出遺構 (第7・12図)

第Ⅷ層上面では溝1条 (SD8) を検出した。

SD8

SD8は、第Ⅷ層上面で、調査区中央東側B5・C5区にて検出した。規模は全長2.5m、幅1.2～1.5m、深さ5～15cmを測る。断面形態は凸レンズ状を呈し、埋土は暗灰色土で礫が混じるものである。出土遺物は、弥生土器、須恵器、中世土師器がある。

出土遺物 (第12図)

23は弥生中期の壺形土器である。口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。頸部には貼付け突帯がある。

時期：出土遺物の中世土師器片より13世紀とする。

(4) 第Ⅸ層上面検出遺構 (第8・12・13図)

第Ⅸ層上面では自然流路3条 (SR3・4・5) と土坑2基 (SK3・4) と焼土1基を検出した。

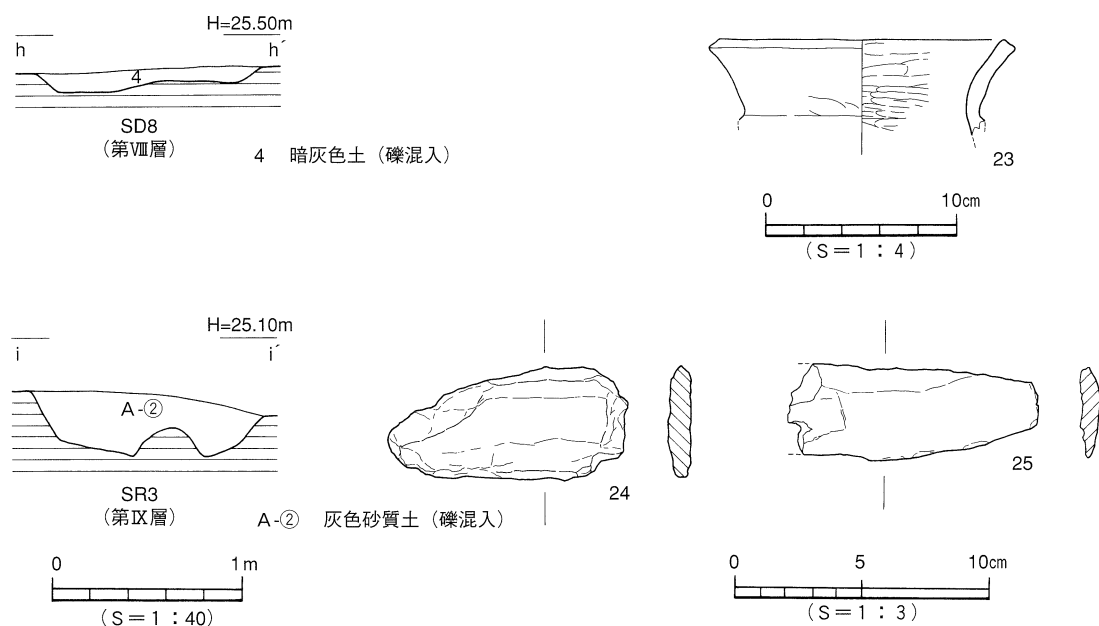
SR3

SR3は、調査区中央北から北東部A3・A4区にて検出した。SR3はSK4を切っている。規模は全長4.5m、幅50～120cm、深さ7～35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰色砂質土に礫が混じるものである。出土遺物には須恵器があり、下層からは石器が2点出土した。

出土遺物 (第12図)

24・25は石庖丁の未製品で、石材は結晶片岩である。

時期：検出層位や出土した須恵器より古墳時代後期～古代とする。



第12図 第Ⅷ・Ⅸ層上面検出遺構測量図・出土遺物実測図

S R 4

S R 4 は、調査区西から南東部 B 1 ～ C 6 区にて検出した。S R 4 は S R 5 を切っている。規模は全長 21.3m、幅 80 ～ 240cm、深さ 5 ～ 50cm を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰色砂質土に礫が混じるものである。出土遺物には、弥生土器と須恵器がある。

出土遺物 (第 14・15 図)

26～36 は甕形土器である。26～28 は口縁部で、ゆるやかに外反し、口縁端面に刻目をもつ。26 は口縁端部が面をなす。27・28 は胴上半部にヘラ描き沈線 1 条を施す。29～32 は胴部で、29・31 は胴上半部にヘラ描き沈線 3 条、30 は胴上半部にヘラ描き沈線 2 条を施す。32 は胴部に刺突文が二段に巡る。33・34 は口縁部片で、口縁端面には刻目がある。35・36 は底部で、平底になる。

37～57 は壺形土器である。37 は中型品の口縁部で、口頸部境に段をもつ。38 は胴部で、3 条の重弧文と 1 条の沈線を施す。39 は頸部から肩部小片で、3 条の弧文と 4 条 1 組の沈線文 (木葉文) を施す。40 は口縁部で、鉢形土器の可能性をもつ。41～45 は胴部小片である。41 は肩部に沈線 3 条を施し、42 は肩部に 4 条の重弧文がある。43 は沈線 1 条と 5 条の沈線 (木葉文か) を施し、44 は複数の沈線で描いた文様をもつ。45 は胴部中位に沈線 1 条を施す。46～57 は底部である。46～51 は平底で、46・47 には沈線 3 条を施している。52～54 はくぼみ底で、55～57 は平底となる。55・57 は甕形土器の可能性もある。

58 は鉢形土器で、口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は面をなし刻目をもつ。

59 は壺形土器の底部を転用したものである。平底で、焼成後の穿孔 (φ1.1cm) をもつ。

60 は土製の紡錘車で、径 0.6cm 大の焼成前の円孔をもつ。

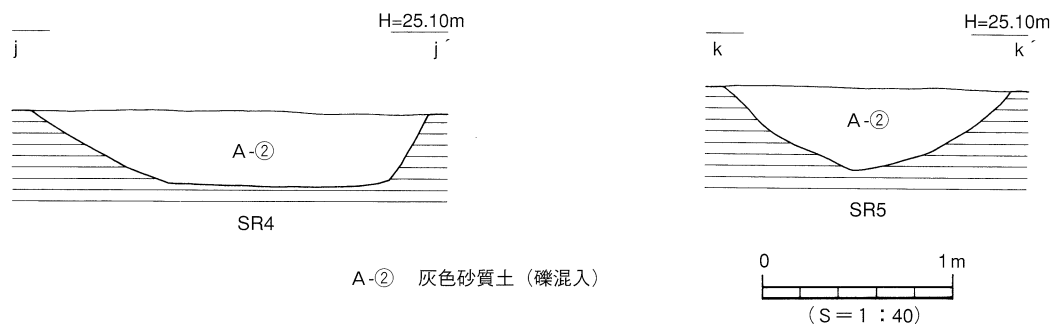
61 は磨製石斧で、伐採斧となる。石材は結晶片岩である。

時期：須恵器の出土と埋土より古墳時代後期～古代とする。

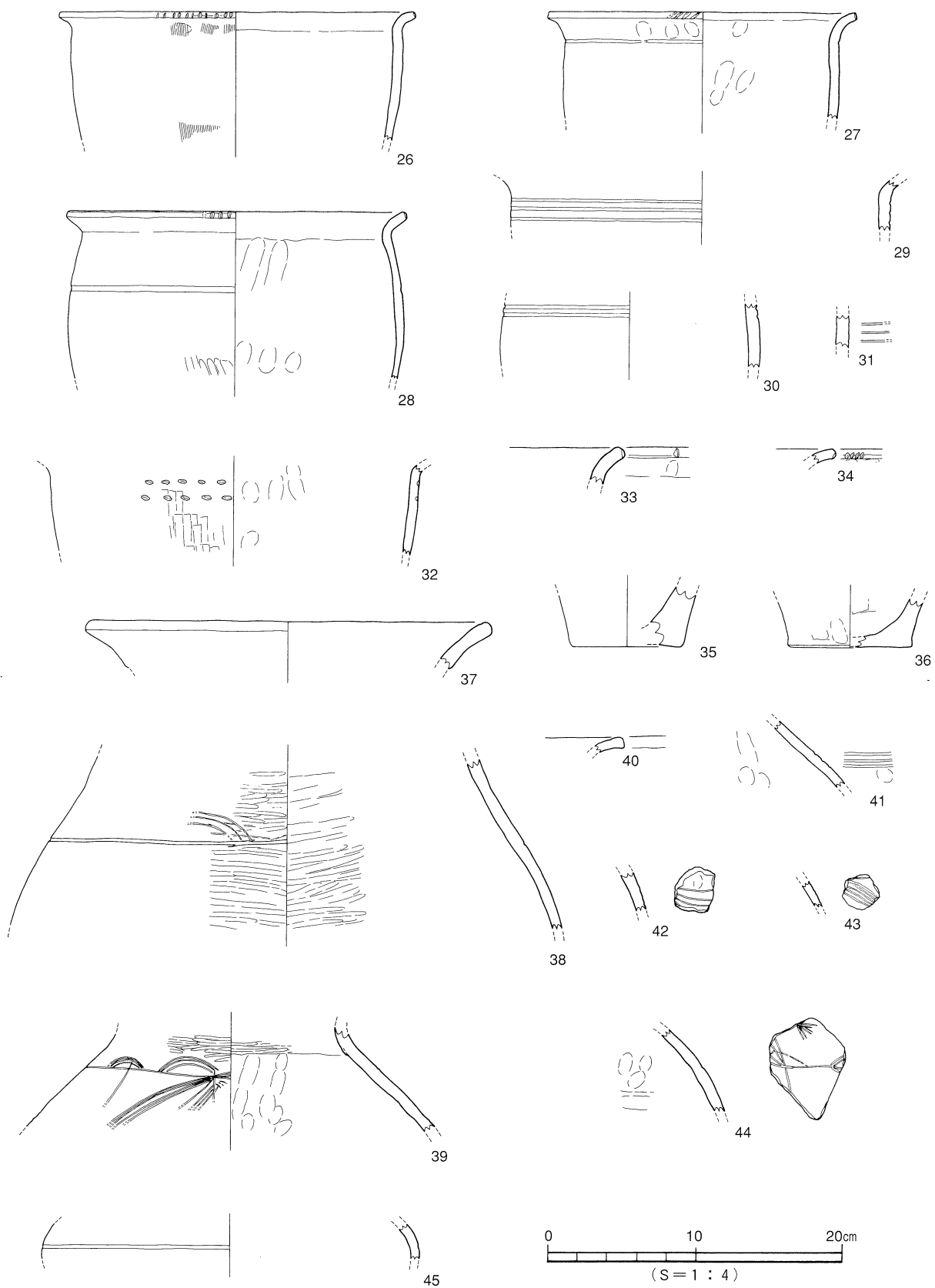
S R 5

S R 5 は、調査区中央南 B 2 ～ C 3 区にて検出した。S R 5 は S R 4 に切られている。規模は全長 2.6m、幅 1.5 ～ 2 m、深さ 20 ～ 45cm を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰色砂質土に礫が混じるものである。なお、埋土の堆積状況は S R 4 に類似していた。遺物は出土していない。

時期：S R 4 の埋土に類似するため古墳時代後期～古代とする。

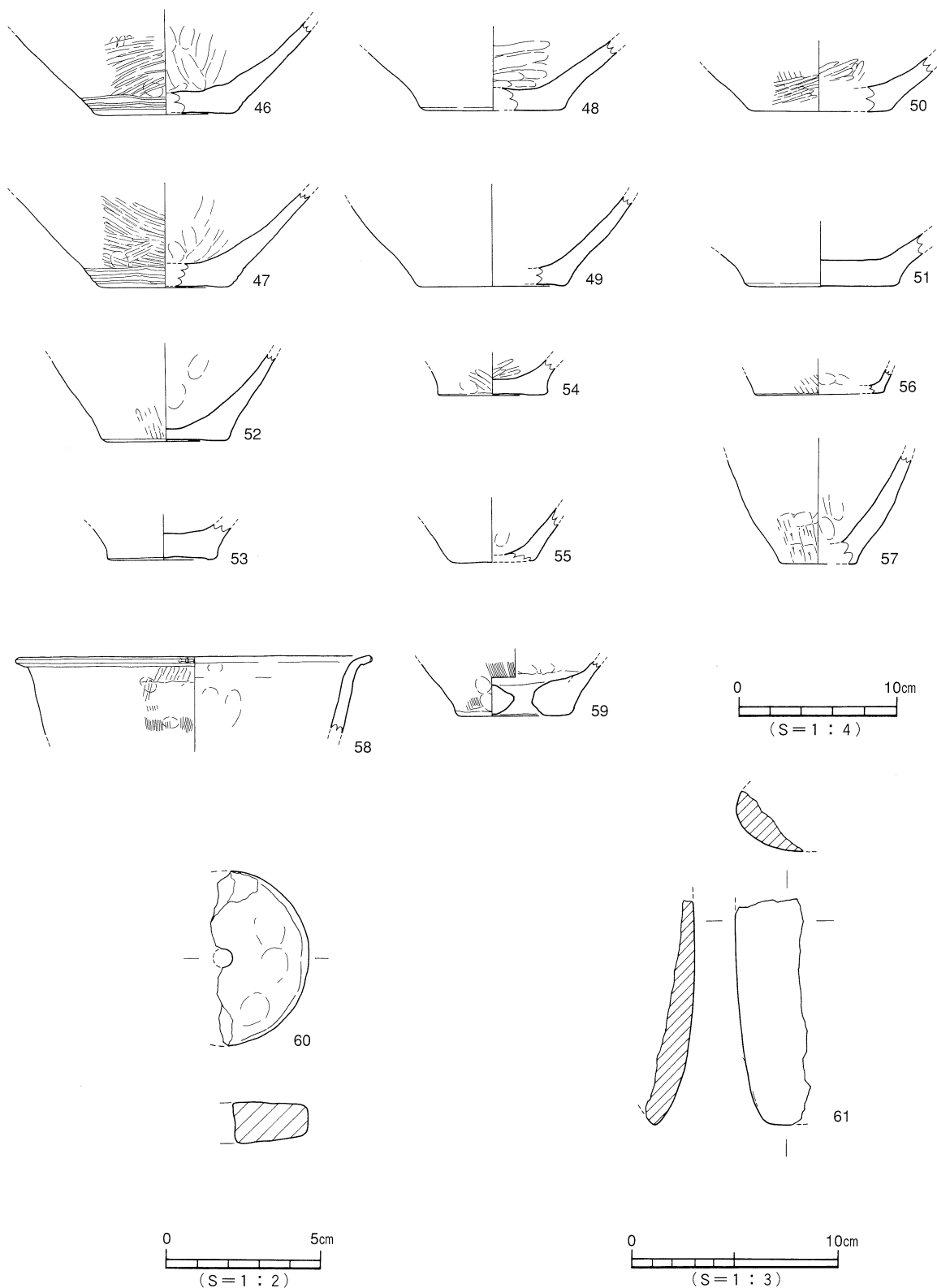


第 13 図 第 IX 層上面検出遺構測量図



第14図 第Ⅸ層上面検出遺構出土遺物実測図 (SR4) (1)

5 次 調 査 地



第15図 第Ⅸ層上面検出遺構出土遺物実測図 (SR4) (2)

S K 3 (第16図)

S K 3 は、調査区東側 A 6・B 6 区にて検出した。平面形態は楕円形で、規模は東西1.1m、南北1.4m、深さ5～30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は上層が茶色土で砂が混じるもの、中層が砂礫層で灰茶色土が混じるもの、下層が暗黄色砂質土である。遺物は出土していない。

時期：検出層位より、古墳時代後期～古代とする。

S K 4 (第16図)

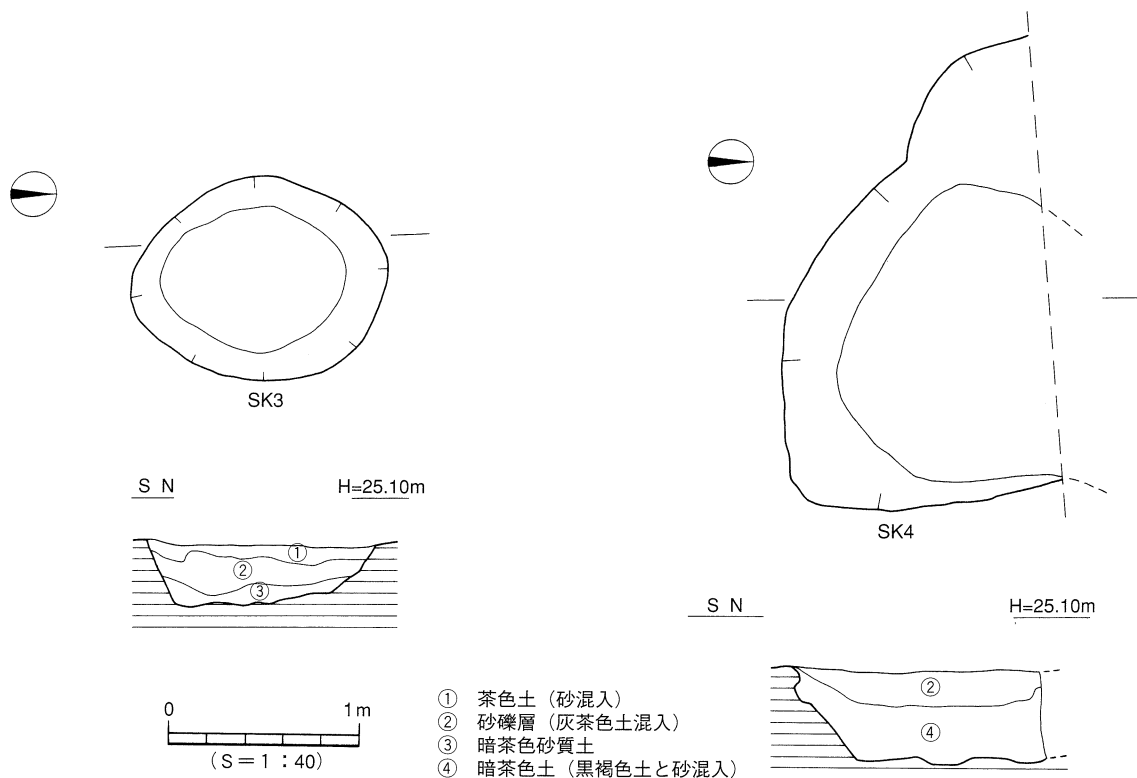
S K 4 は、調査区北東側 A 4・A 5 区にて検出した。S K 4 は S R 3 に切られている。平面形態は楕円形で、規模は東西2.4m、南北検出長1.5m、深さ5～50cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は上層が砂礫層で灰茶色土が混じるもの、下層は明茶色土で、黒褐色土と砂が混じるものである。遺物は出土していない。

時期：検出層位より、古墳時代後期～古代とする。

焼土

焼土は、調査区南 C 3 区で検出した。焼土は楕円形状に分布し、規模は東西90cm、南北55cm、深さ2～10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰黄色シルトに炭と砂とが混じるものである。遺物は出土していない。炭は、自然科学分析の結果縄文時代晩期のクリと判明した。

時期：自然科学分析より縄文時代晩期とする。



第16図 第IX層上面検出遺構測量図

(5) 砂礫層

調査区の四方の土層壁では砂礫層を12ヶ所(砂礫①～⑫)確認した。これ等は、調査工程上重機で掘削し、平面形状を調査することができなかった。ここでは、調査区の土層壁で検出したものを砂礫①～⑫と呼称し、土層壁での検出状況を記述する。

砂礫①

砂礫①は、西壁南端と南壁西端のC1区にて検出した。砂礫①は第Ⅶ-1層の上であり、第Ⅱ層に覆われる。規模は幅2.0m、深さ5～30cmを測る。埋土は灰色砂層で、灰色が濃いものである。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

砂礫②

砂礫②は、西壁中央部A1・B1区にて検出した。砂礫②は第Ⅷ-1層とSR4の上であり、第Ⅵ-1層とSD4に覆われている。規模は幅3.9m、深さ5～40cmを測る。埋土は灰色砂層である。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

砂礫③

砂礫③は、東壁北端～北壁東端A6区にて検出した。砂礫③は第Ⅸ層の上であり、D層に覆われている。規模は幅4.3m、深さ5～45cmを測る。埋土は灰色砂礫層で、礫は2cm大である。遺物はない。

時期：検出層位より中世とする。

砂礫④

砂礫④は、東壁中央南側B6・C6区にて検出した。砂礫④は第Ⅷ-1層と第Ⅶ-2層の上であり、第Ⅳ-1層に覆われている。規模は幅3m、深さ10～20cmを測る。埋土は灰色砂層である。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

砂礫⑤

砂礫⑤は、南壁東部～東壁南端C5・C6区にて検出した。第Ⅶ-1層と砂礫⑧⑫の上であり、第Ⅵ-1層に覆われている。規模は幅5.3m、深さ5～40cmを測る。埋土は灰色砂層で、灰色が濃いものである。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

砂礫⑥

砂礫⑥は、北壁中央と南壁中央A2・A3～C3区にて検出した。砂礫⑥は第Ⅳ-1層を切り、第Ⅲ層・砂礫⑩が覆う。南北に流れると思われる。北壁では幅2.3m、深さ5～75cm、南壁では幅1m、深さ5～40cmを測る。埋土は灰色砂層である。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

砂礫⑦

砂礫⑦は、東壁中央西側A 6～B 6区にて検出した。第Ⅸ層・Ⅹ層と第Ⅴ－1層の上であり、第Ⅱ層・第Ⅳ－2層に覆われている。規模は幅2.6 m、深さ5～35cmを測る。埋土は灰色砂礫層で、砂が多く、2 cm大の礫を含む。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

砂礫⑧

砂礫⑧は、南壁東側C 5・C 6区にて検出した。第Ⅷ－1層と砂礫⑨の上であり、砂礫⑤と第Ⅳ－2層に覆われている。規模は幅3 m、深さ5～35cmを測る。埋土は灰色砂礫層で、礫は2～8 cm大である。遺物は中世土師器片が出土した。

時期：遺物は土師器が出土したため、中世に比定する。

砂礫⑨

砂礫⑨は、南壁東側C 4・C 5区にて検出した。砂礫⑨は第Ⅶ－1・2層の上であり、第Ⅵ－1層と砂礫⑧に覆われる。規模は幅4.4 m、深さ5～35cmを測る。埋土は灰色砂層である。遺物は中世土師器片が出土した。

時期：遺物は土師器が出土したため、中世に比定する。

砂礫⑩

砂礫⑩は、南壁中央C 3区にて検出した。砂礫⑩はS R 5の上であり、第Ⅶ－1・2層と第Ⅵ－1・2層と砂礫⑥に覆われる。規模は幅2.2 m、深さ5～60cmを測る。埋土は灰色砂礫層で、礫は2 cm大である。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

砂礫⑪

砂礫⑪は、北壁西側A 2区にて検出した。砂礫⑪は第Ⅸ層と砂礫⑥の上であり、近現代坑に切られる。規模は幅1.7 m、深さ5～15cmを測る。埋土は灰色砂礫層で、礫は2～15cm大である。遺物は出土していない。

時期：検出層位より中世とする。

砂礫⑫

砂礫⑫は、東壁南端～南壁東端C 6区にて検出した。砂礫⑫は第Ⅷ－3層の上であり、砂礫⑤に覆われる。規模は幅2.5 m、深さ5～50cmを測る。埋土は灰色砂礫層で、礫は2～5 cm大である。遺物は出土していない。

時期：S R 5の埋土に類似するため古墳時代後期～古代とする。

(6) 包含層ほか出土遺物 (第17図、図版7)

ここでは包含層や出土地点が特定できないものを取り上げる。

砂礫⑧・⑨ (62・63) : 62・63は砂礫⑧ないし⑨の出土品である。62は縄文時代晩期の深鉢で、口縁部はゆるやかに外反し、突帯上と口縁端面に刻目がある。63は支脚形土器で、角状の受部をもつ。弥生後期末。

第Ⅱ層 (69) : 69は須恵器の高坏脚部で、1条の凹線を施す。7世紀前半。

第Ⅲ層 (64～66) : 64は鉢形土器で、口縁部はゆるやかに外反する。甕形土器の可能性をもつ。弥生前期。65は甕形土器である。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部には刻目がある。弥生前期。66は壺形土器の胴部片で、沈線3条を施す。弥生前期。

第Ⅵ層 (71) : 71は石器素材で、石材は結晶片岩である。弥生時代。

第Ⅶ層 (67) : 67は壺形土器の大型品である。頸部小片で、口頸部境に突帯を貼付けたのち沈線1条を施す。弥生前期。

第Ⅷ層 (70) : 70は須恵器の高坏脚部で、脚端部は小さく垂下する。7世紀。

地点不明・近現代坑 (68・72・73) : 68は出土地点が特定できないもので、土師器甕の口縁部である。口縁部は内湾してたちあがる。5世紀。72・73は近現代坑の出土品である。72は石器素材で、石材は結晶片岩である。弥生時代。73は打製石鏃で、石材はサヌカイトである。縄文晩期～弥生前期。

4. 小 結

松山大学構内遺跡5次調査地では、遺構は縄文時代～中世の溝6条、自然流路5条、土坑3基、焼土1基を検出し、遺物は縄文晩期～中世の土器・石器が出土した。

2次・3次調査地では弥生時代から古墳時代までの竪穴式住居址を多数検出したが、5次調査地では溝を検出したにとどまった。これは、松山大学構内の図書館東側が弥生時代～古墳時代に居住域でなかったことを示していることになる。

第Ⅸ層上面検出の焼土は自然科学分析の結果、縄文時代晩期のクリの炭化物が含まれていた。北170mには同時代の南海放送(道後樋又)遺跡があるが、縄文時代晩期の遺構検出は初例である。

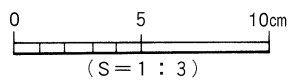
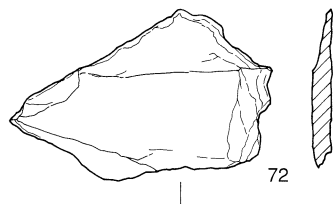
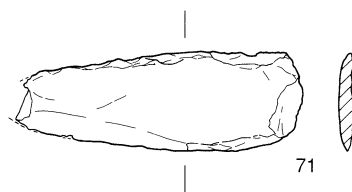
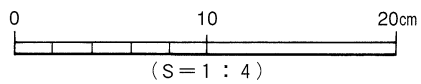
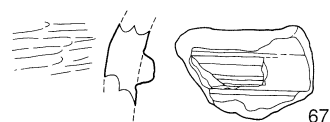
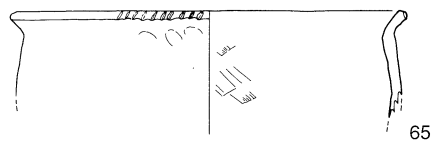
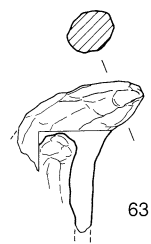
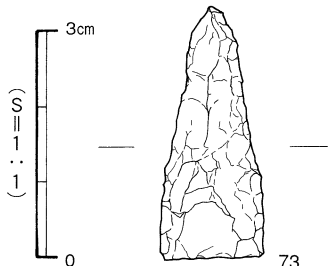
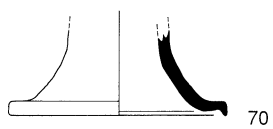
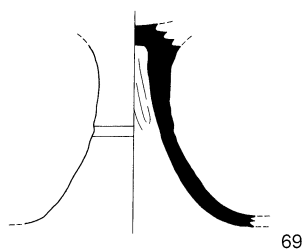
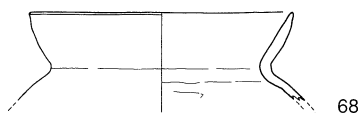
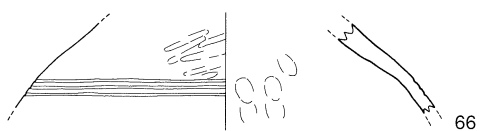
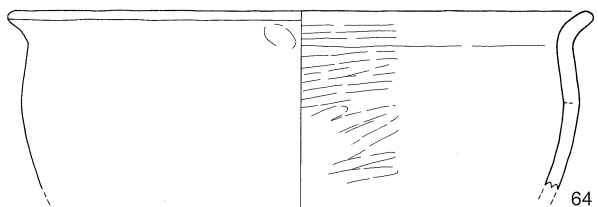
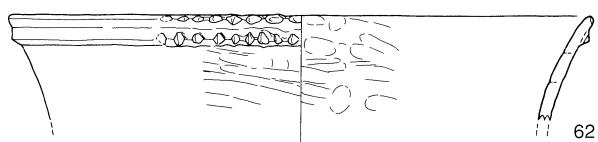
溝は、一般的に生活での排水や水田、土地区画に利用されるものであるが、今回検出の溝6条は遺存状況が恵まれず、その用途までは特定できなかった。

遺物では、弥生時代前期の土器が注目される。出土品は前期Ⅱに比定されるもので、東500mの東中学校(文京遺跡4次)で同時期の竪穴式住居址が検出されている。SR4出土品は混入品であるが、東中学校構内からのものにするにはその距離から理解しがたい。よって、松山大学構内もしくは隣接地に弥生前期Ⅱ段階の集落が存在するものと推察したい。

以上、5次調査の報告を行った。今回の調査では、松山大学構内の縄文～古墳時代の居住域を推定する資料を得たことになる。また、新しく近隣に弥生前期の集落が存在を明らかにした。

〔参考文献〕

- 梅木謙一 1991 『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 宮内慎一 1995 『松山大学構内遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター



砂礫⑧か⑨：62・63
 第Ⅱ層：69
 第Ⅲ層：64～66
 第Ⅵ層：71
 第Ⅶ層：67
 第Ⅷ層：70
 地点不明：68
 近現代坑：72・73

第17図 包含層ほか出土遺物実測図

遺構・遺物一覧（水本完児）

(1) 遺物観察表の各記載について。

法 量 欄 (): 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 長→長石、石→石英、密→精製土。()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~4)→「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表2 土坑一覧

土坑(SK)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B2・B3区	方 形	逆台形	南北1.9×東西1.7×0.05~0.30	3.23	上層 黒褐色土 下層 茶色粘土	弥生土器	中～近世	第Ⅵ層上面
3	A6・B6区	楕円形	逆台形	1.4×1.1×0.1~0.5	1.54	上層 茶 色 土 中層 砂 下層 暗黄色砂	無	古墳時代後期 ～古代	第Ⅸ層上面
4	A4・A5区	楕円形	逆台形	東西2.4×南北1.5×0.05~0.50	3.6	上層 砂 下層 明茶色土	無	古墳時代後期 ～古代	第Ⅸ層上面

表3 溝一覧

溝(SD)	地 区	断 面 形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A1～C2区	凸レンズ	7.0×1.5~1.8×0.05~0.35	北-南	灰褐色粘土 (小さい礫混じり)	無	中世	第Ⅶ層上面
2	A2～C2区	凸レンズ	6.6×0.9~1.0×0.05~0.30	北-南	灰褐色土 (礫混じり)	弥生土器 土師器	中世(12世紀)	第Ⅶ層上面
4	B4・C4区	凸レンズ	1.6×1.1~1.8×0.20~0.30	東-西	灰色土 (礫混じり)	無	中世	第Ⅶ層上面
8	B5・C5区	凸レンズ	2.5×1.2~1.5×0.05~0.15	東-北	暗灰色土 (礫混じり)	弥生土器 須恵器	中世(13世紀)	第Ⅷ層上面
9	A3～B3区	凸レンズ	3.0×0.8~0.9×0.10~0.35	北-南	灰褐色土	無	中世	第Ⅶ層上面
10	A3～B3区	凸レンズ	3.1×0.4~0.7×0.07~0.30	北-南	灰褐色土	無	中世	第Ⅶ層上面

表4 自然流路一覧

流路(SR)	地 区	断 面 形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A1～A4区	[U]字状	13.7×1.2×0.3~0.55	東-西	上層 灰色砂 下層 灰色砂層 (礫混じり)	弥生土器 須恵器 土師器	中世	第Ⅷ層
2	A4～C6区	凸レンズ	10.0×0.5~1.2×0.1~0.3	東-北	灰褐色土 (砂混じり)	弥生土器 須恵器	中世	第Ⅶ層
3	A3・A4区	逆台形	4.5×0.5~1.2×0.07~0.35	東-西	灰色砂 (礫混じり)	須恵器 石器	古墳時代後期 ～古代	第Ⅸ層
4	B1～C6区	逆台形	21.3×0.8~2.4×0.05~0.5	東-西	灰色砂 (礫混じり)	弥生土器 須恵器	古墳時代後期 ～古代	第Ⅸ層
5	B2～C3区	逆台形	2.6×1.5~2.0×0.2~0.45	北-南	灰色砂	無	古墳時代後期 ～古代	第Ⅸ層

遺物観察表

表5 第Ⅶ層上面検出遺構出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	椀	底径(6.5) 残高 2.0	土師器の椀。底部には高台がつく。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	密 ◎	SD2	
2	土釜	残高 6.5	三足土釜の脚部である。	マメツ		暗褐色	石・長(1~3) ◎	SR1	
3	皿	底径(5.5) 残高 1.3	土師器の皿である。底部は平底。 回転糸切り。	㊸回転 ㊸回転糸切り	回転ナデ	淡茶色 淡茶色	密 ◎	SR1	
4	坏	口径(10.2) 残高 3.45	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。底部は平底。体部内面に暗文あり。	回転ナデ	㊸回転ナデ ㊸ナデ→暗文	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1~4) ◎	SR1	
5	坏蓋	残高 3.6	小片。天井部と口縁部の境界に断面三角形の稜をもつ。口縁部は直立気味に下がり口縁端部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SR1	
6	坏蓋	口径(11.7) 残高 3.2	天井部からなだらかな弧を描いて下がり、口縁部は直立気味に下がる。口縁端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡青灰色	密 ◎	SR1	
7	坏蓋	口径(10.9) 残高 2.8	口縁部はなだらかに下がり、やや内湾する。口縁端部は尖り気味。	㊸回転ヘラケズリ ㊸回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎	SR1	
8	坏身	口径(11.4) 残高 3.7	立ち上がりは内傾し、端部は内傾する。受部は上外方にのび、端部は丸く仕上げる。	㊸回転ナデ ㊸回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 淡灰褐色	密 △	SR1	
9	坏身	口径(9.1) 残高 2.2	立ち上がりは内傾し、端部は尖り気味である。受部は上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎	SR1	
10	坏	口径(11.2) 残高 1.9	坏身ない坏蓋である。口縁部はやや内湾し、端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SR1	
11	坏	口径(10.4) 残高 2.9	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は尖る。	㊸回転ナデ ㊸回転ヘラケズリ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎	SR1	
12	坏	口径(11.1) 残高 2.6	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎	SR1	
13	甕	残高 4.0	須恵器の甕の小片である。口縁部は外反し、口縁端部は平な面をなす。口縁外面に斜め方向の凹線。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SR1	
14	甕	口径(14.7) 残高 4.3	口縁端部は内湾し、端部は小さく垂下する。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎	SR1	
15	甕	口径(24.0) 残高 3.8	口縁部は外反する。口縁端面に刻みがある。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 灰褐色	石・長(1~3) ◎	SR1	
16	甕	底径(5.8) 残高 3.8	くびれの上げ底である。	ヨコナデ	マメツ	黄茶色 暗茶色	石・長(1~3) 金 ◎	SR1	
17	ジョッキ	残長 4.3	把手の一部である。	ナデ		茶色	石・長(1~3) ◎	SR1	
18	壺	口径(15.5) 残高 4.6	口縁部は短く外反する。口縁端部は尖り気味。	㊸ヨコナデ ㊸マメツ	マメツ	灰黄色 黒茶色	石・長(1~3) 金 ◎	SR1	
19	椀	底径(4.0) 残高 1.7	同安窯系の青磁椀である。	回転ケズリ	回転ナデ	緑灰色 緑灰色	密 ◎	SR2 釉薬	
20	平瓶	残高 11.0	口縁部は欠失し、胴部はほぼ完形品である。丸みをおびた扁平球の体部。	㊸上回転ナデ ㊸下ナデ	㊸上回転ナデ ㊸下ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SR2	6
21	甕	口径(23.0) 残高 3.3	土師器の甕である。口縁部小片。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~4) 金 ◎	SR2	

第Ⅶ層上面検出遺構出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
22	壺	口径(22.4) 残高 8.4	外反する口縁部。口頸部境は段をなす。	マメツ	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	淡茶色 乳黄色	石・長(1~4) ◎	SR2	6

表 6 SD 8 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
23	壺	口径(15.0) 残高 5.0	外反する口縁部。口縁端部は面をなす。 頸部に貼付け突帯。	ヨコナデ	ミガキ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		

表 7 SR 3 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
24	石 庖 丁	2/3	結晶片岩	9.4	4.4	0.9	63.2	未製品	7
25	石 庖 丁	2/3	結晶片岩	9.8	3.6	1.7	40.4	未製品	7

表 8 SR 4 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
26	甕	口径(23.6) 残高 8.9	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は面をなし、刻目をもつ。	ハケ→ナデ	マメツ	淡褐色 淡茶色	石・長(1~3) ◎		6
27	甕	口径(20.6) 残高 7.5	ゆるやかに外反する口縁部。胴上半部にヘラ描き沈線1条を施す。口縁端面に刻目がある。	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	ナデ	暗茶色 淡茶色	石・長(1~3) 金 ◎		6
28	甕	口径(22.4) 残高 11.5	ゆるやかに外反する口縁部。胴部に沈線1条を施す。口縁端面に刻みがある。	マメツ	マメツ	灰褐色 灰褐色	石・長(1~3) ◎		6
29	甕	残高 3.7	胴部小片。胴上半部にヘラ描き沈線3条を施す。	ヨコナデ	マメツ	淡褐色 淡褐色	石・長(1~3) 金 ◎		6
30	甕	残高 4.4	胴部小片。胴部にヘラ描き沈線2条を施す。	マメツ	ナデ	暗褐色 褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
31	甕	残高 2.3	胴部小片。ヘラ描き沈線3条を施す。	マメツ	マメツ	黄茶色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		6
32	甕	残高 6.0	胴部上半である。口縁端部は欠損している。胴部に刺突文が上段に巡る。	ナデ(板ナデ?)	ナデ	灰黄褐色 暗黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		6
33	甕	残高 2.5	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部に刻目。	ヨコナデ	マメツ	黄灰色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
34	甕	残高 1.0	口縁端部小片。端面に刻目がある。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1~2) ◎		
35	甕	底径 (7.2) 残高 4.1	平底。	マメツ	マメツ	暗茶色 茶色	石・長(1~4) ◎		
36	甕	底径 (8.5) 残高 3.4	平底。	ナデ	ナデ	茶色 暗褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
37	壺	口径(26.6) 残高 3.3	口縁部の小片。中型品。 口頸部境に段をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 灰褐色	石・長(1~3) 金 ◎		

遺物観察表

SR4 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
38	壺	残高 11.6	胴部である。3条の重弧文と1条の沈線を施す。	ミガキ	ミガキ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~4) 金 ◎		6
39	壺	残高 7.1	頸部から肩部の小片。3条の弧文と4条1組の沈線文(木葉文)を施す。	ミガキ	◎ミガキ ◎ナデ	乳褐色 淡茶色	石・長(1~2) 金 ◎		6
40	壺	残高 1.0	口縁部である。端部は丸い。鉢の可能性もある。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 暗茶色	石・長(1~4) 金 ◎		
41	壺	残高 4.6	胴部小片。肩部に沈線3条を施す。	マメツ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~4) ◎		
42	壺	残高 2.6	胴部小片。肩部に4条の重弧文がある。	ナデ	ナデ	黄茶色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		6
43	壺	残高 1.9	胴部小片。沈線1条と5条の沈線(木葉文)を施す。	マメツ	マメツ	茶色 茶色	石・長(1~2) 金 ◎		
44	壺	残高 5.5	胴部小片。複数の沈線で描いた文様をもつ。	マメツ	ナデ	乳茶色 淡茶色	石・長(1~3) ◎		6
45	壺	残高 2.4	胴部小片。胴部中に沈線1条を施す。	ヨコナデ	ナデ	淡灰黄色 淡灰黄色	石・長(1~2) 金 ◎		
46	壺	底径(9.0) 残高 5.9	底部は平底である。沈線3条を施す。	ミガキ	ナデ	灰褐色 淡褐色	石・長(1~3) 金 ◎		7
47	壺	底径(8.3) 残高 6.1	底部は平底である。沈線3条を施す。	ミガキ	ナデ	茶褐色 乳褐色	石・長(1~3) 金 ◎		7
48	壺	底径(9.2) 残高 4.5	底部は平底である。	マメツ	ナデ	暗黒茶色 乳褐色	石・長(1~5) 金 ◎		
49	壺	底径(9.2) 残高 5.7	底部は平底である。	マメツ	マメツ	赤茶色 褐色	石・長(1~4) 金 ◎		
50	壺	底径(9.6) 残高 3.5	底部は平底である。	ミガキ	ミガキ	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
51	壺	底径(9.1) 残高 3.4	底部は平底である。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~4) ◎		
52	壺	底径 8.2 残高 5.6	底部はくぼみのある平底。	マメツ	ナデ	橙茶色 黄茶色	石・長(1~4) ◎		
53	壺	底径 7.0 残高 2.3	底部はくぼみ底となる。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) 金 ◎		
54	壺	底径 7.5 残高 2.3	底部はくぼみ底となる。	ミガキ	ミガキ	橙茶色 橙茶色	石・長(1~4) 金 ◎		
55	壺	底径(5.2) 残高 3.5	底部は平底である。甕の可能性をもつ。	マメツ	ナデ	暗茶色 乳灰色	石・長(1~2) 金 ◎		
56	壺	底径(8.2) 残高 1.6	底部の小片で、平底となる。	ミガキ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石(1) ◎		
57	壺	底径(4.9) 残高 7.0	底部は平底である。甕の可能性をもつ。	ナデ	ナデ	黒茶色 淡褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
58	鉢	口径(22.5) 残高 5.0	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は面をなし、刻目をもつ。	◎ヨコナデ ◎ハケ→ミガキ	◎ヨコナデ ◎マメツ	茶褐色 褐色	石・長(1~2) 金 ◎		

5 次 調 査 地

SR 4 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
59	こしき	底径 8.1 残高 3.4	底部は平底である。焼成後の穿孔 (φ 1.1cm) をもつ。	ハケ	ナデ	灰褐色 黄灰色	石・長(1~3) ◎		7
60	紡錘車	残存 1/2 長さ 5.5 厚さ 1.3	土製の紡錘車。径0.6cm大の焼成前の円孔を穿つ。重さ27.8g。	ナデ		黄褐色	石・長(1~2) ◎		7

SR 4 出土遺物観察表 石製品

(4)

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
61	磨製石斧	1/3	結晶片岩	10.9	3.3		131.04	伐採斧	7

表 9 包含層ほか出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
62	深鉢	口径(30.0) 残高 5.5	口縁部片。口縁部はゆるやかに外反する。突帯上と口縁端面に刻目がある。	擦痕	ナデ(ミガキ?)	灰黄色 褐色	石・長(1~3) 金 ◎	砂礫 ⑧⑨	7
63	支脚	残高 8.0	角状の受部をもつ。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~4) ◎	砂礫 ⑧⑨	
64	鉢	口径(29.6) 残高 9.4	口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部は丸い。甕形土器の可能性をもつ。	ナデ	ミガキ	淡茶褐色 灰褐色	石・長(1~3) 金 ◎	第Ⅲ層 黒斑	
65	甕	口径(20.0) 残高 5.7	口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部に刻みがある。	マメツ	◎ヨコナデ ◎ハケ→ナデ	灰褐色 茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎	第Ⅲ層	
66	壺	残高 4.8	胴部小片。沈線 3 条を施す。	ミガキ	ナデ	褐色 暗褐色	石・長(1~3) 金 ◎	第Ⅲ層	
67	壺	残高 4.4	大型品の頸部小片。口頸部境に突帯を貼付けた後、沈線 1 条を施す。	ナデ	ミガキ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~4) ◎	第Ⅶ層	7
68	甕	口径(13.6) 残高 4.7	口縁部は内湾して立ち上がる。	ヨコナデ	◎マメツ ◎ケズリ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~2) 金 ◎	地点 不明	
69	高坏	残高 7.9	脚部である。1 条の凹線を施す。	回転ナデ	◎上シボリ痕 ◎中回転ナデ	淡灰色 淡灰色	密 ◎	第Ⅱ層	
70	高坏	底径 (8.2) 残高 3.3	脚部である。脚端部は小さく垂下する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 白灰色	密 ◎	第Ⅷ層	

包含層ほか出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
71	石器素材		結晶片岩	11.2	3.9	0.6	40.5	第Ⅵ層	7
72	石器素材		結晶片岩	10.2	6.7	0.8	66.9	近現代坑	7
73	打製石鏃	完 形	サヌカイト	3.4	1.3	0.3	1.6	近現代坑 平基式	7

第3章 4次調査地

1. 調査の経緯

平成2年12月、学校法人松山大学より、書庫増設工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

松山大学構内では、これまでに2回の調査を行い、主に弥生時代から古墳時代までの集落が確認され、多くの竪穴式住居址が検出されている。

松山市教育委員会文化教育課は松山大学からの確認願いの申請を受け、申請地における埋蔵文化財の有無を確認するために、平成6年6月に試掘調査を実施した。

2. 試掘調査

(1) 工程

試掘調査は、平成6年6月20日～同年6月30日の間に行った。調査は申請地の全体に対して行うものとしたため、立会のもと調査前に全ての造成土を重機により掘削した。

調査は近現代坑の除去と調査区土層壁の精査からはじめた。

近現代坑を除くと南西部に暗褐色土、南東部に暗灰褐色土を検出し、各々を掘り下げると土器片が出土した。なお、南東隅では暗灰褐色土を除去するとくぼ地が現れ、自然流路を検出するにいたった。土層壁は、土層の線引きを行い、表土を含む基本土層を6層（第Ⅰ～Ⅵ層）と最下部に第Ⅶ層の砂層と第Ⅷ層砂礫層を検出した。

調査は、近現代坑や自然流路などの測量と土層壁の記録をとり、写真撮影を行い6月30日に終了した。

(2) 層位 (第19図)

調査では、基本層位をⅠ～Ⅵ層とし、最下部には砂層及び砂礫層が検出された。

第Ⅰ層は表土で、現代の造成土である。厚さは120～140cmとなる。

第Ⅱ層は緑灰色土で、調査区の南側で検出された。厚さは10～30cmである。

第Ⅲ層は緑灰色の砂質土で、調査区の西側～南側で検出された。厚さは10～20cmである。

第Ⅳ層は淡黄褐色土で、西側と東側の一部を除き調査区全域にある。厚さは10～20cmである。

第Ⅴ層は暗褐色土で、調査区の西側に検出が限られた。厚さは10cmにみたない。南西部では土器の小片を含む。

第Ⅵ層は黄色土で、北東部を除き調査区全域にある。

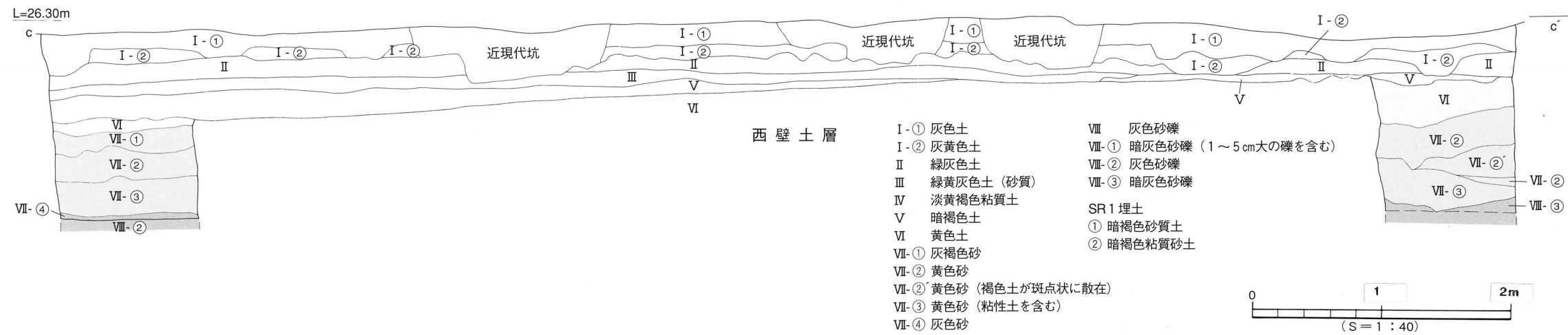
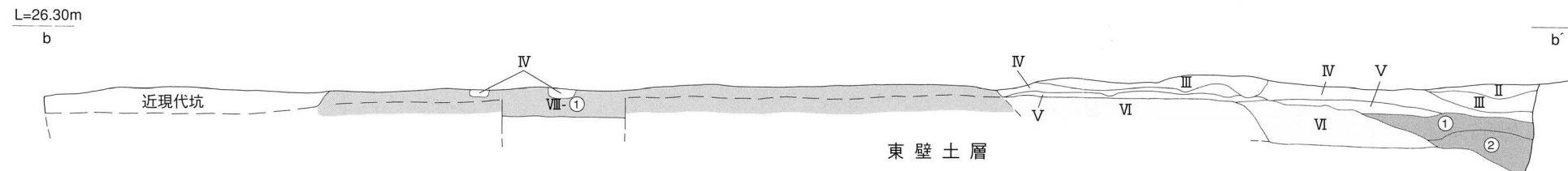
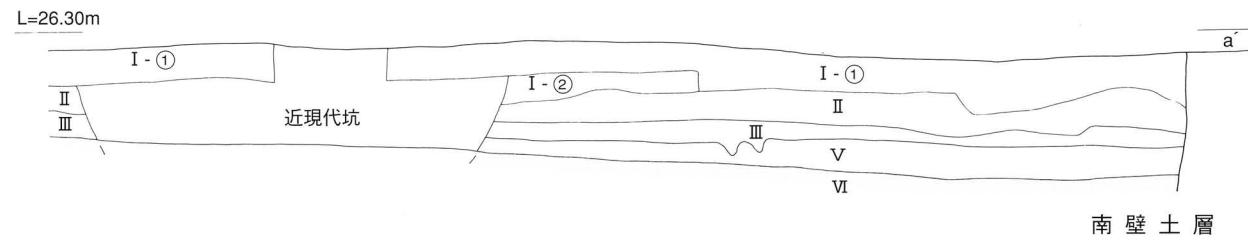
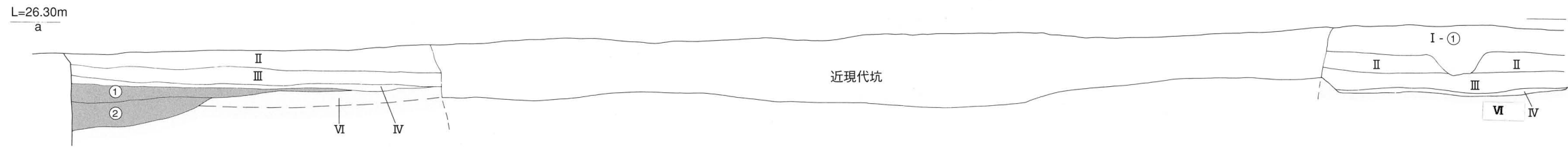
最下部は砂層と砂礫層となる。これ等の層は、色調と砂・礫の形状及び包含量から分層される。全てが同一の土層かは判断できなかったため、基本層位には含めなかった。

第Ⅶ層は砂層で、第Ⅶ-①層灰褐色微砂と第Ⅶ-②黄色砂層は東部を除き調査区全域にある。第Ⅶ-②'層は黄色砂で褐色土が斑点状に散在し、第Ⅶ-③層は黄色砂（粘質土を含む）で、北西隅で検出された。第Ⅷ層は砂礫層（1～5cm大の礫）で、第Ⅶ層の下部で概ね検出される。

4 次 調 査 地



第18図 遺構配置図



第19図 土層図

(3) 遺構と遺物 (第18図、図版8)

遺構は、自然流路1条 (SR1) を検出した。

SR1は、調査区南東隅にあり、第VI層を切り込み、第V層が覆う。自然流路は北側の掘り方を検出しただけで、南側は調査区外となる。検出長は140cm、検出幅は60cm、深さは35cmである。断面形態は逆台形状で、ゆるやかな傾斜面と広い基底部をもつ。埋土は暗灰褐色土の単層である。埋土中からは6世紀代の須恵器坏蓋の小片が1点出土した。

そのほか、遺物は、第V層から土器の細片が5点出土したが、器種や時期はわからない。

3. 小 結

今回の試掘調査では、6世紀代の自然流路と遺物包含層を確認した。

SR1は古墳時代に比定できる。松山大学構内遺跡では、古墳時代の居住域は構内西側に集中しており、SR1は居住域の東限と推定する一つの資料である。

遺物包含層は、第V層の暗褐色土があてられる。2・3次調査地は、本調査地の西100~200m離れた地点にあり、第V層との対比はできなかった。

なお、第VI層黄色土は、当遺跡及び東隣りの文京遺跡 (愛媛大学構内) でみられる縄文後晩期の包含層で、弥生時代遺構の基盤層となっている。第VI層は、本調査地では標高25.5~26.0mを測り、2・3次調査地では24m代となる。弥生時代の旧地形を復元する一資料である。

以上、試掘調査についてその工程と結果を記述した。調査地は近現代に大きく造成されたようであるが、本来は遺構が存在していたことを確認できた。また、旧地形を復元する資料も得た。松山大学構内は、全域に遺構が分布しており、今後とも継続的な調査が必要である。

調査担当：宮内慎一、報告：宮内慎一・梅木謙一。

表10 自然流路一覧

流路 (SR)	地 区	断 面 形	規 模 (m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	南東隅	逆台形	1.4×0.6×0.35	北東-南西	暗灰褐色土	須恵器	6世紀	

第4章 自然科学分析

I. 松山大学構内遺跡5次調査における出土炭化物の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、C3区第IX層上面焼土遺構から出土した炭化材である（P14-第8図）。

2. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75~750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

分析の結果、ブナ科のクリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

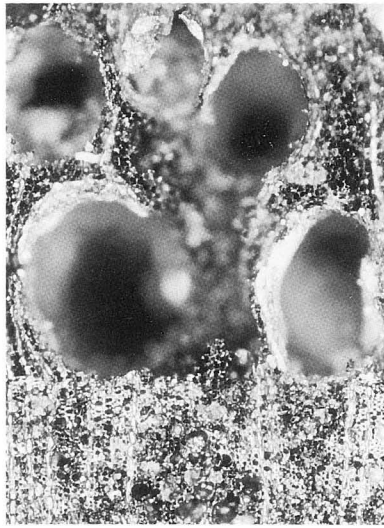
4. 所見

C3区第IX層上面から出土した炭化材はクリであった。クリは、北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ20m、径40cm程度であるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木などに広く用いられている。

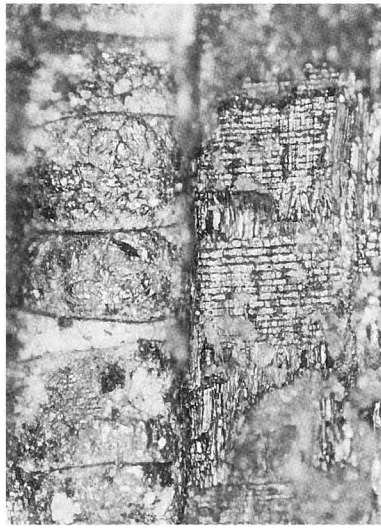
文献

佐伯 浩・原田 浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造、文永堂出版、p.20-48.

佐伯 浩・原田 浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造、文永堂出版、p.49-100.



横断面 ————— : 0.4mm
炭化材 クリ



放射断面 ————— : 0.4mm



接線断面 ————— : 0.2mm

第20図 出土材の顕微鏡写真



第21図 第Ⅸ層上面検出の焼土遺構

II. 松山大学構内遺跡 5 次調査における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	C 3 区 IX層上面焼土	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 交点 (1σ)	測定No. (Beta-)
No.1	2400±50	-26.6	2370±50	BC 400 (BC 415~390)	120872

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年 A D) から何年前 (B P) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代 (西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年 B P より古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 値が表記される場合もある。

第5章 調査の成果と課題

本書では、5次調査及び4次調査について報告を行った。

ここでは、調査成果と今後の調査課題をあげ、本書のまとめとする。

1. 層位

調査では、基本層位として第Ⅰ～Ⅹ層を設定した。第Ⅰ・Ⅱ層は近現代、第Ⅲ～Ⅵ層は中世～近世、第Ⅶ層は古代～中世、第Ⅷ層は古代に堆積した土壌である。

これ等の土層を最も近い4次調査地と対応させる。

明確に対比できたのは古代～中世土壌の5次第Ⅶ層＝4次第Ⅳ層、古墳時代～古代土壌の5次第Ⅷ層＝4次第Ⅴ層、弥生以前の5次第Ⅸ層＝4次第Ⅵ層、さらに下部の5次第Ⅹ層＝4次第Ⅶ層となる。また、時代関係から対比できるのは中世～近世土壌の5次第Ⅲ～Ⅵ層＝4次第Ⅱ～Ⅲ層である。

道後城北地区では、5次第Ⅸ層上面で弥生時代遺構が検出され、第Ⅸ層中には縄文時代後晩期の土器が出土する。よって5次第Ⅸ層上面の起伏は弥生時代集落の景観を復元するには重要となる。第5次・第4次調査地でこれをみると、第4次調査地の方が高い標高値を示しており、これは以後の古墳～近世までの堆積土壌とも同じ傾向をもつ。したがって第4次調査地、現在の図書館から第5次調査地までの土地は、弥生時代から近世までは緩やかな下りの傾斜地となっていたことが本調査より推定できる。

2. 古墳時代～古代

5次調査では溝1条（SD8）、自然流路3条（SR3～5）、土坑2基（SK3・4）を検出し、4次調査では自然流路1条（SR1）を確認した。

溝と自然流路は、概ね東西方位を示しており、当時の地形に沿うように流れている。埋土はいずれも粗砂を主体としたもので、流れの規模を現している。一方、古墳時代～古代の居住域は、構内西の2・3次調査地点にある。今回の調査結果は、図書館西側の2・3・4号館が居住域の東限になることを推測させるものである。

遺物には、須恵器・土師器・弥生土器があるが、注目されるのはSR4出土の弥生前期の資料である。出土地点はSR4の中央西より4m区間に限られ、破片の大きさや磨滅状態から同時期の土器群と考えられる。出土品には、甕形土器・壺形土器・鉢形土器があり、焼成後穿孔の底部や紡錘車、石斧もみられる。土器は甕形土器に三条の沈線が施されるものがみられるが、その器形と文様から弥生前期Ⅱに属するものである。第2章4小結でも触れているが、松山大学構内もしくは隣接地に同時期の集落があるものと推察され、新しい調査成果である。

3. 中・近世

5次調査では土坑1基（SK1）、溝5条（SD1・2・4・9・10）、自然流路2条（SR1・2）を検出した。また調査日程から未調査となったが第Ⅱ～Ⅷ層の間には土層断面から砂礫層が12層確認されている。

調査では、自然流路や溝が多数検出された。これによって当地は、中近世にいたっても地形が不安定で、居住域としては適していなかったことが分かる。

遺物には、溝や自然流路から貿易陶磁器が2点出土した。松山大学一帯では中世集落、特に居住域は明確ではない。貿易陶磁器の出土は当時の集落評価に関わることであり、貿易陶磁器が帰属する集落を特定することは重要である。

さて、松山大学城北キャンパスの北100mには同大学の御幸キャンパスがある。御幸キャンパス一帯では調査は稀薄であるが、唯一の事例がキャンパス北西350m地点にある御幸遺跡である。御幸遺跡からは中世の遺構と遺物が確認されている。5次調査と関係し、また御幸キャンパス一帯の遺跡動態が知れる資料であり、附編として掲載し、今後の調査に役立てていただきたい。

4. 自然科学分析

5次調査では、第Ⅸ層上面検出の焼土遺構に含まれる炭化物について樹種同定と放射性炭素年代測定を実施した。自然科学分析の結果、炭化物はブナ科のクリと同定され、年代測定ではBC400年（BC415～390年）が得られた。対象試料は出土状況より、クリの木を切って、出土地点で焼いたものといえ、第Ⅸ層上面は縄文時代晩期の生活面となる。なお、第Ⅸ層検出のそのほかの遺構は古墳時代以降のものであり、上部層から掘り込まれたものである。ところで、第Ⅸ層が遅くとも縄文時代晩期には堆積していたことが明らかになったわけだが、周辺地をみると、北170mに同時代の遺物を包含する南海放送（道後樋又）遺跡がある。この遺跡の第8層が今回検出の層に時代的には対応しそうである。松山大学周辺ではこれまでに縄文時代晩期の遺構は検出されておらず、本例は遺構としては初例となり、分析の結果は貴重なものといえる。

以上、4・5次調査のまとめを記述した。

松山大学構内は継続的な調査により、自然地形を含む集落動態が少しずつ明らかになってきた。溝や自然流路が西側の居住域とどのような関係にあるかは課題である。文京遺跡をはじめとする道後城北地区では水田や畑といった生産域は未だ明らかでなく、今回検出の資料の延長区域は課題解決の糸口といえる。また、城北キャンパスから御幸キャンパス一帯の中世集落についても留意していきたい事象である。

附編Ⅰ 御幸遺跡

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯 (第2・22図)

本調査は、松山大学御幸キャンパス北西350m、松山市御幸2丁目259番1・4・5の個人住宅開発に伴う発掘調査である。当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『46 長建寺古墳』内にあり、一帯は古墳時代から中世までの墳墓及び集落地帯であることが知られている。調査は、1990(平成2)年4月の試掘調査をもとに1997(平成9)年8月1日より松山市教育委員会文化教育課が主体となり森本のり江、稲見勝、田中寿佳の協力を得て実施された。調査は主に古墳時代から中世までの集落構造解明を目的とした。

(2) 調査組織

遺跡名	御幸遺跡
調査場所	松山市御幸2丁目259番1・4・5
調査期間	1997(平成9)年8月1日～同年10月14日
調査面積	243.20m ² 、243.18m ² 、243.20m ²
調査担当	調査員 梅木謙一・水本完児

2. 層位 (第24図)

調査地は、松山平野北西部、御幸寺山麓南西裾部の標高21.6～22.1mに立地する。

基本層位は、第Ⅰ層造成土、第Ⅱ層耕作土、第Ⅲ層床土、第Ⅳ層灰色土、第Ⅴ層茶色土、第Ⅵ層茶色砂質土、第Ⅶ層灰色粘土、第Ⅷ層褐色砂質土である。

第Ⅰ層は、造成土で、厚さ30～75cmを測る。調査区全域で検出する。

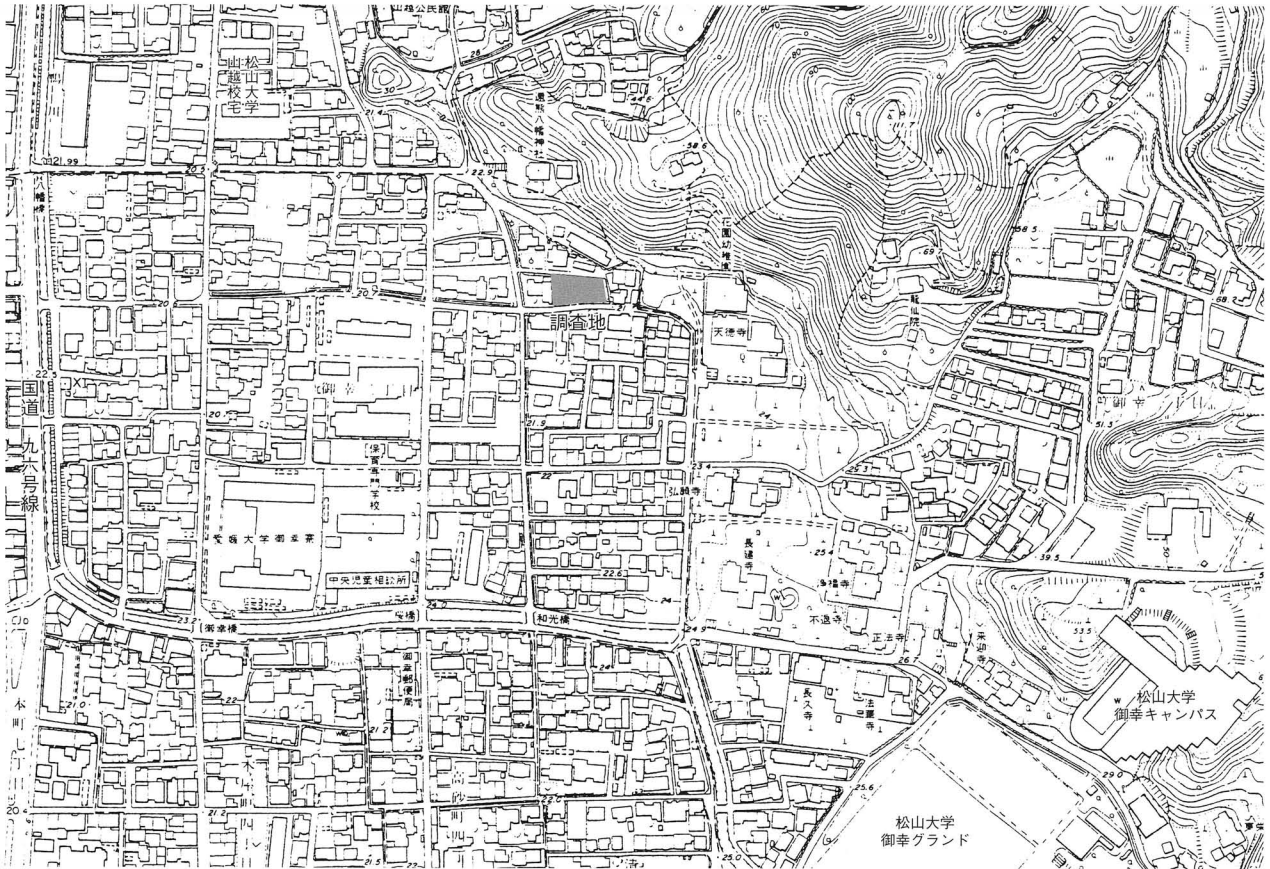
第Ⅱ層は、耕作土で、厚さ5～20cmを測る。調査区全域で検出する。

第Ⅲ層は、床土で、厚さ2～10cmを測る。調査区全域で検出する。

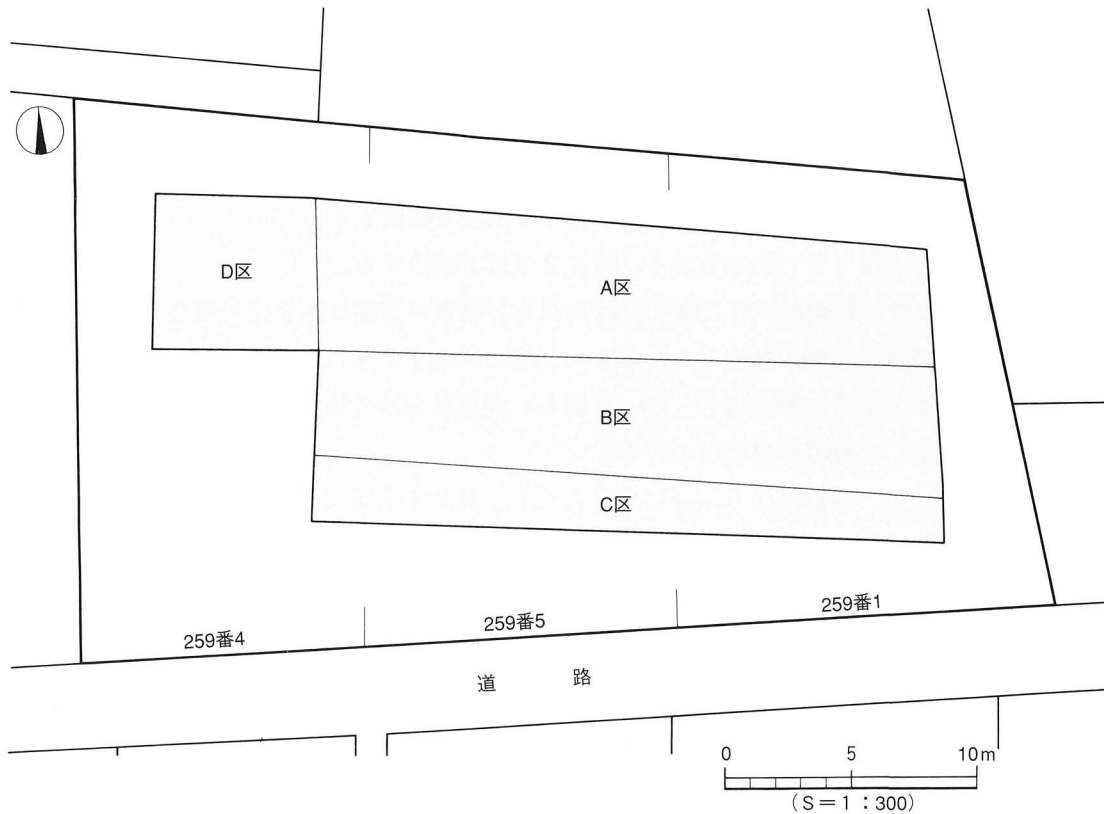
第Ⅳ層は、灰色土で、色調差より二層に分けられる。第Ⅳ-①層は灰色土の褐色砂混じりで、厚さ7～20cmを測り、調査区全域で検出した。第Ⅳ-②層は灰色土の褐色砂混じりであるが、第Ⅳ-①層より色調が濃いものである。厚さは5～20cmを測り、調査区全域で検出した。遺物は、両層から弥生土器と中世の須恵器、土師器が出土している。

第Ⅴ層は、茶色土で、色調差より三層に分けられる。第Ⅴ-①層は茶色土の灰色砂混じりで、厚さ5～30cmを測り、調査区全域で検出した。第Ⅴ-②層は茶色土の灰色砂混じりであるが、第Ⅴ-①層より色調が濃い。厚さ7～25cmを測り、調査区北のA2～A8、東のA8～D8、南壁東側から中央までのD5～D8で検出した。第Ⅴ-③層は第Ⅴ-②層に黄色土が混じるもので、厚さ7～15cmを測る。調査区西A1～D2、北壁西側A1～A2、中央南から西側までのD2～D5で検出した。遺物は、すべての土層から中世の須恵器と土師器が出土している。

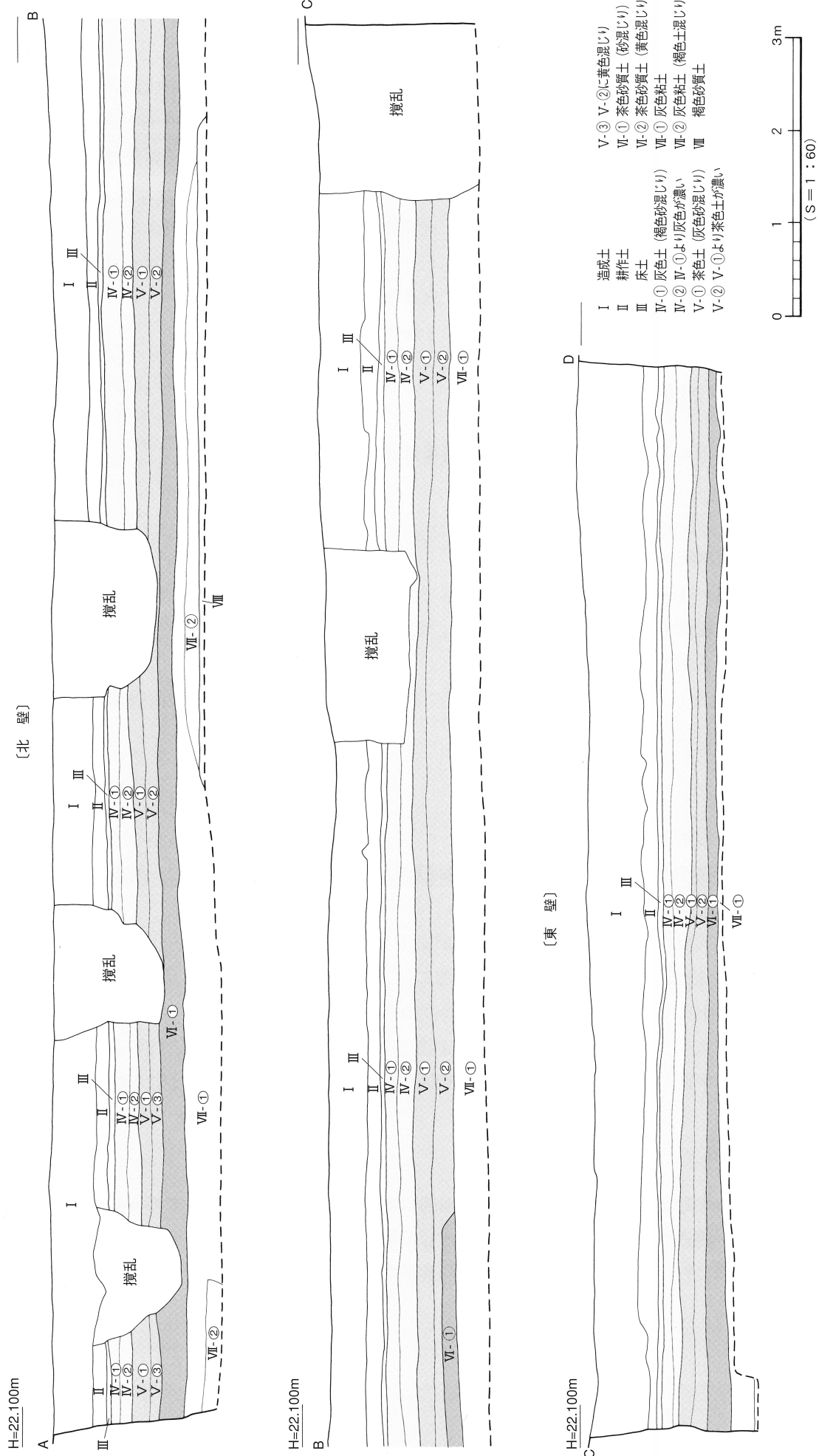
第Ⅵ層は、茶色砂質土で、色調差より二層に分けられる。第Ⅵ-①層は茶色砂質土の砂混じりで、厚さ5～35cmを測り、調査区全域で検出した。第Ⅵ-②層は茶色砂質土に黄色土が混入するものであ



第22図 調査地位置図 (S = 1 : 5,000)



第23図 調査地測量図



第24図 北・東壁土層図

る。調査区南のD1～D6で検出したが、北壁と東壁では検出できなかった。厚さは5～20cmを測り、遺物は両層より古代～中世の須恵器と土師器が出土している。

第Ⅶ層は、灰色粘土で、砂の包含量より二層に分けられる。第Ⅶ-①層は灰色粘土で、厚さ3～40cmを測る。調査区全域で検出し、無遺物層である。第Ⅶ-②層は灰色粘土に褐色土が混入するもので、厚さ3～15cmを測る。北壁トレンチ西側のA1、北壁中央A3～A4、東壁北東A8～B8の一部で検出した。無遺物層である。

第Ⅷ層は、褐色砂である。北壁中央で検出し、無遺物層である。

以上より、遺物包含層は、第Ⅳ層から第Ⅵ層の3層を確認することになった。

3. 遺構と遺物 (第25図)

本調査では、中世の遺構を確認した。中世の遺構は井戸1基である。

(1) 中世

井戸 (SE) (図版11)

SE1は、第Ⅵ-①層中の調査区中央、B4区で検出した。平面形態は、円形を呈し、断面形態は円筒形となる。規模は東西1.13m、南北1.07m、深さ1.47mを測る。埋土は茶色砂質土(砂混じり)である。SE1は素掘で、遺物は出土していない。

時期：遺物は出土していないが、井戸の埋土には中世の土壌が入り、かつ検出層位より中世前半(13世紀～14世紀)に比定する。

(2) 出土遺物

遺物は第Ⅳ層から第Ⅵ層までで出土している。

第Ⅳ層からは、弥生土器と中世の須恵器、土師器が出土した(第26図1～4)。時期は、出土物より中世の15・16世紀に比定される。

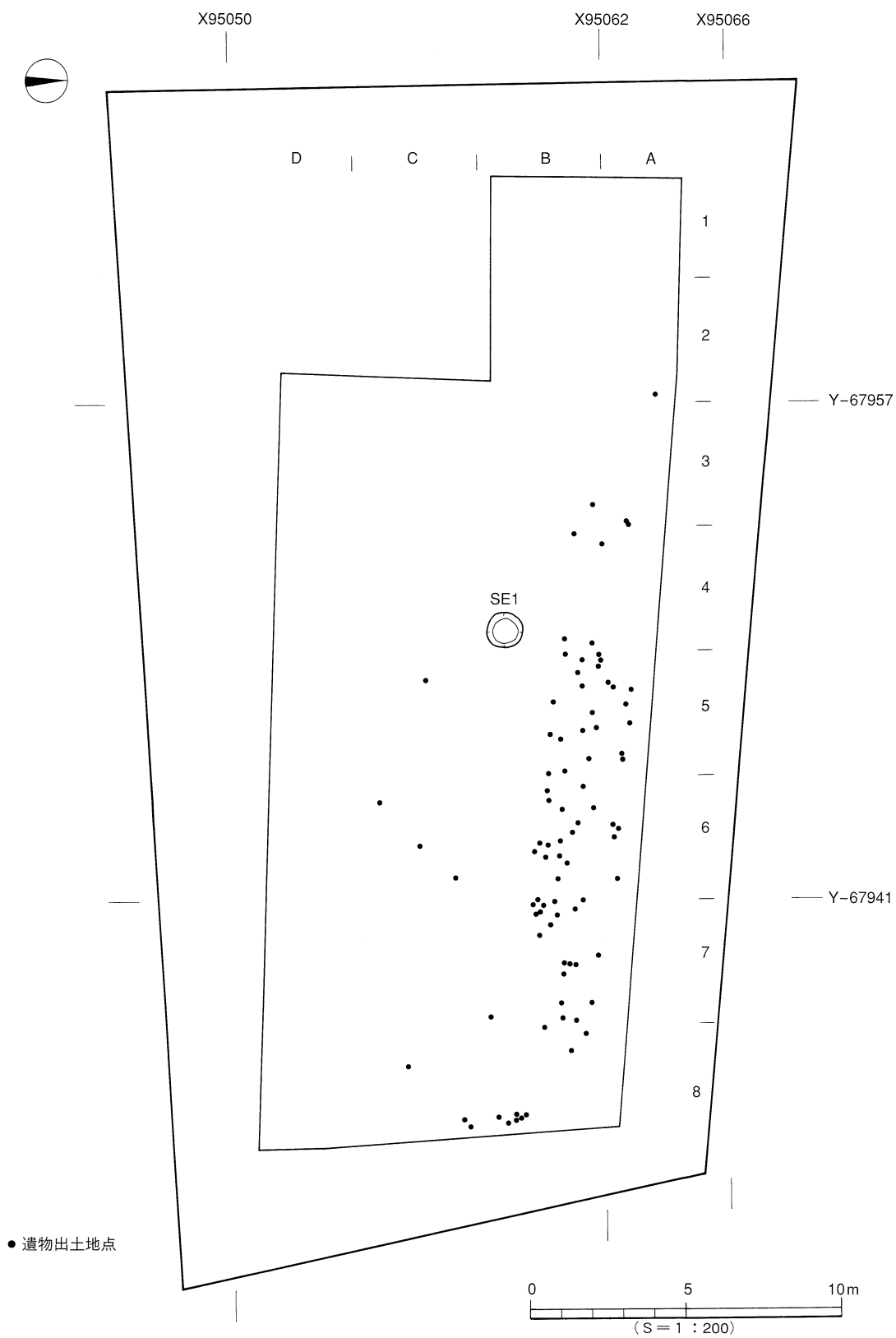
第Ⅴ層からは、古代～中世の須恵器と土師器が出土した(第26図5～15)。古代の遺物には須恵器の脚付鉢と提瓶、土師器の坏があり、中世の遺物には、須恵器碗、土師器坏、瓦器碗(和泉型)、土師器の鍋などが出土している。時期は古代～中世の10～14世紀に比定される。

第Ⅵ層からは、古代～中世の須恵器と土師器が出土した(第26図16～21)。古代の遺物には土師器の坏や碗があり、中世の遺物には土師器の鍋などがある。時期は10～13世紀に比定される。

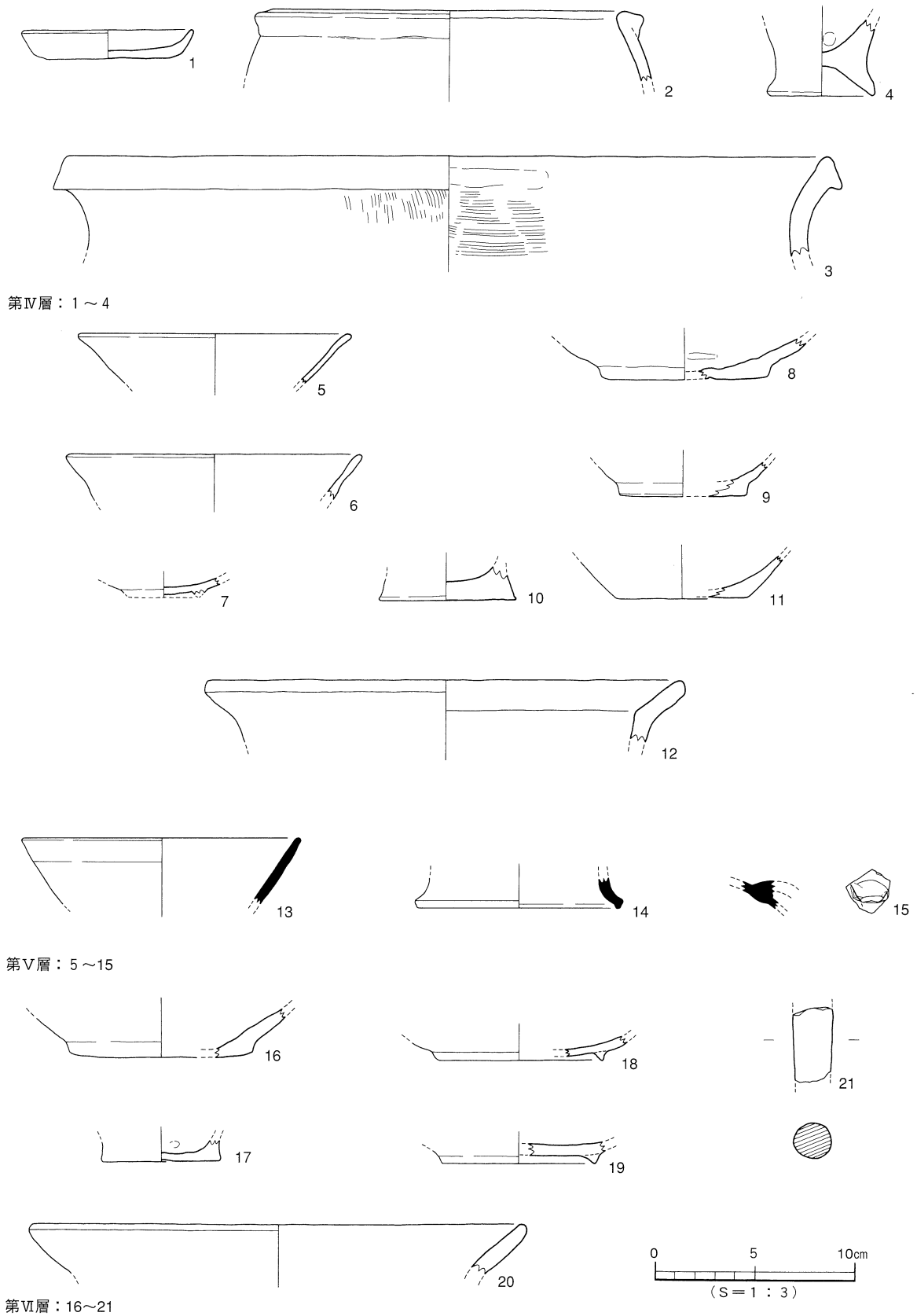
4. 小結

調査地は、松山平野北西部、御幸寺山麓南西裾部にあり、御幸町内では初めての本格的な発掘調査である。調査は、周辺の山越地区の調査を参考とし、主に古墳時代から中世までの集落範囲とその構造を解明するために行った。調査の結果、中世の遺構を検出し、古代から中世までの遺物包含層を確認した。

小 結



第25図 検出遺構と遺物



第26図 包含層出土遺物実測図

①中世の井戸SE1は素掘りで、平面形態は円形を呈していた。遺物は出土していないが、井戸の埋土には中世の土壌が入り、かつ検出層位より中世前半（13世紀～14世紀）に比定した。井戸の確認より、当地一帯には中世集落が存在していることは確実である。松山平野における中世井戸は、北斎院地内遺跡1・2次調査地、辻町遺跡2次調査地で確認されているが、平野では数少ない検出例になる。

②包含層は出土遺物より第IV層と第V・VI層の二時期に分けられる。第IV層では、中世（15・16世紀）の須恵器、土師器（坏・釜）が出土し、第V・VI層では、古代～中世（10～14世紀）の須恵器と土師器（椀・和泉型瓦器椀・鍋）が出土した。第IV層と第V層の間には明確な時期差がみられ、当地域の中世における鍵層となるものである。本資料は、当地域に同時代の集落が存在したことを裏付ける新資料といえる。

本調査では、御幸遺跡における古代から中世の遺物と遺構を確認することになったが、古墳時代の遺構は検出されなかった。これは、当地が古墳時代には小河川の氾濫源であったことに起要している。今後は、資料の増加を待って、御幸町一帯の古代から中世の集落様相を究明しなければならない。

〔参考文献〕

河野史知・相原浩二編 1995 「辻町遺跡2次調査地」『辻町遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 武正良浩 1994 「北斎院地内遺跡1・2次調査地」『斎院の遺跡』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物一覧（水本完児）

(1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法 量 欄 () : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、頸→頸部、底→底部

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1～4) →「1～4 mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

表11 井戸一覧

井戸 (SE)	地 区	平 面 形	断 面 形	規 模 (m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	B 4	円形	円筒形	1.13×1.07×1.47	0.95	茶色砂質土 (砂混じり)	ナシ	13～14C	第VI①層中検出

表12 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	皿	口径(8.6) 底径(6.6) 器高 1.45	体部は内湾し、口縁端部は丸い。 底部の切り離しは、回転ヘラ切り技法である。残存は約1/4である。	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	㊦ヨコナデ ㊧ナデ	乳白色 乳白色	密石・長(1) ◎	IV層	
2	土釜	口径(19.3) 残高 3.3	土師器の土釜。口縁部は内湾し、口縁端部に断面三角形の突帯が付く。	ナデ	ナデ	灰茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~4) ◎	IV層	
3	甕	口径(37.6) 残高 5.0	瓦質の甕である。口縁端部は下方に拡張する。	㊦ヨコナデ ㊨ハケ(6本,cm)	㊦ヨコナデ ㊨ハケ(8本,cm)	灰茶色 灰黄色	石・長(1~3) ◎	IV層	
4	甕	底径(5.4) 残高 3.8	弥生土器の甕の底部。上げ底である。	マメツ	ナデ(指頭痕)	茶褐色 暗灰色	石・長(1~3) 金◎	IV層	
5	椀	口径(13.6) 残高 2.5	和泉型の瓦器椀である。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰色・灰色 乳灰色・灰色	石・長(1) ◎	V層	
6	椀	口径(14.4) 残高 2.2	和泉型の瓦器椀である。小片。	マメツ	マメツ	黄灰色・灰色 黄灰色	密石・長(1) ◎	V層	
7	椀	残高 0.85	和泉型の瓦器椀の底部片である。 輪高台の痕路あり。小片。	マメツ	マメツ	乳灰色 黒灰色	石・長(1~2) ◎	V層	
8	杯	底径(8.4) 残高 2.0	土師器の杯である。底部は円盤高台である。底部の切り離しは、回転ヘラ切り技法である。	マメツ	ナデ	乳茶色 淡黄茶色	石・長(1~3) ◎	V層	
9	杯	底径(6.2) 残高 1.7	土師器の杯である。底部は円盤高台である。底部の切り離しは、回転ヘラ切り技法である。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄灰色 乳黄灰色	密石◎	V層	
10	杯	底径 6.9 残高 1.45	土師器の杯である。底部は円盤高台である。底部の切り離しは、回転ヘラ切り技法である。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石(1~2) 長(1) ◎	V層	
11	杯	底径(6.6) 残高 2.1	土師器の杯である。底部は平底である。底部の切り離しは、回転ヘラ切り技法である。	ナデ	ナデ	乳白茶色 灰茶色	石・長(1) ◎	V層	
12	鍋	口径(24.1) 残高 2.0	土師器の鍋である。口縁部は屈折し、口縁部内面に稜線が付く。小片。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1~3) 金◎	V層	
13	椀	口径(13.8) 残高 3.3	須恵器の椀である。体部は直立し、口縁部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密石◎	V層	
14	鉢	底径(9.8) 残高 1.5	須恵器の脚付鉢か?。脚端部は下内方に屈曲する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	密石◎	V層	
15	提瓶	残高 2.15	須恵器の提瓶の把手か?。	ナデ	ナデ	青灰色 黄青灰色	密石◎	V層	
16	杯	底径(9.15) 残高 2.4	円盤高台の土師器杯である。底部は1/6の残存である。	マメツ	マメツ	白茶色 茶白色	石・長(1) ◎	VI層	
17	杯	底径(5.8) 残高 1.05	円盤高台の土師器杯である。底部外面に回転ヘラ切り痕有り。	ナデ	ナデ	灰茶黄色 灰茶黄色	密石◎	VI層	
18	椀	底径(8.2) 残高 1.25	土師器の椀である。断面三角形の高台を有する。器壁は薄い。小片。	マメツ	マメツ	淡黄色 黒灰色	石・長(1~3) 金◎	VI層	
19	椀	底径(7.6) 残高 1.1	土師器の椀である。断面三角形の高台をもつ。内黒椀。	ヨコナデ	マメツ	乳茶色 黒灰色	石・長(1~2) 金◎	VI層	
20	鍋	口径(24.8) 残高 1.15	土師器の鍋である。小片。	ナデ	ナデ	灰茶色 茶黄色	石・長(1~3) ◎	VI層	
21	釜	残高 3.7	釜の脚部である。	マメツ		茶褐色 灰褐色	石・長(1~2) ◎	VI層	

写真図版

写真図版例言

1. 遺構の撮影は調査担当者及び大西が行い、5次調査では、高所作業車を利用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67 55mm他
	ニコンニューFM2		ズームニッコール 28～85mm他
フィルム	プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP		

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ	トヨ/ビュー45G
レンズ	ジンマーS 240mm
ストロボ	コメット/CA-32・CB2400 (バンク使用)
スタンド他	トヨ/無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	プラスXパン

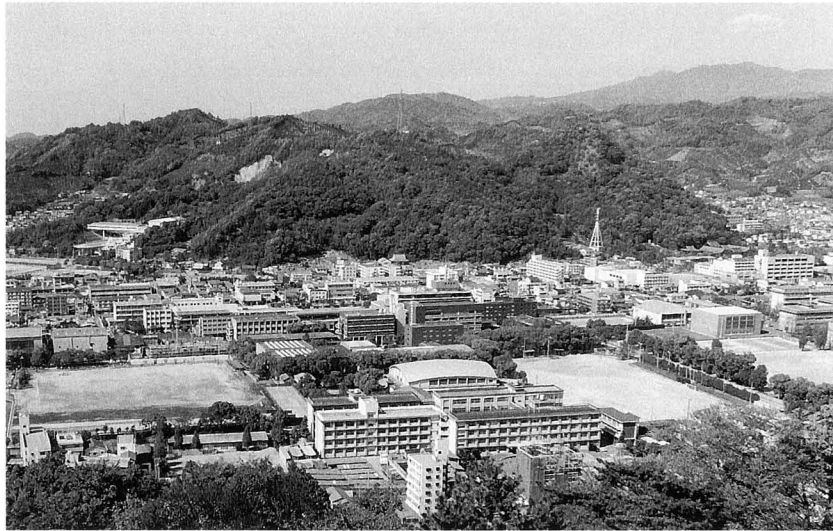
3. 白黒写真の現像・焼き付けは、一部を除いて大西が行った。

使用機材：

引伸機	ラッキー450MD
	ラッキー90MD
レンズ	エル・ニッコール135mm
	エル・ニッコール50mm
印画紙	イルフォードマルチグレードIVRC
フィルム現像剤	コダックD-76・HC110

【参考】『埋文写真研究』Vol.1～9

(大西朋子)



1 調査地遠景（南より）



2 調査地周辺（東より）



3 調査地近景（西より）



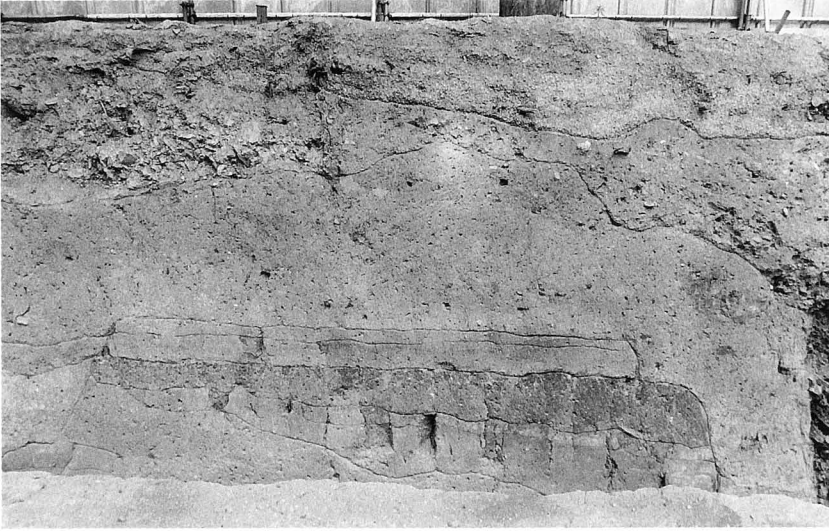
1 第Ⅷ層上面遺構完掘状況①（東より）



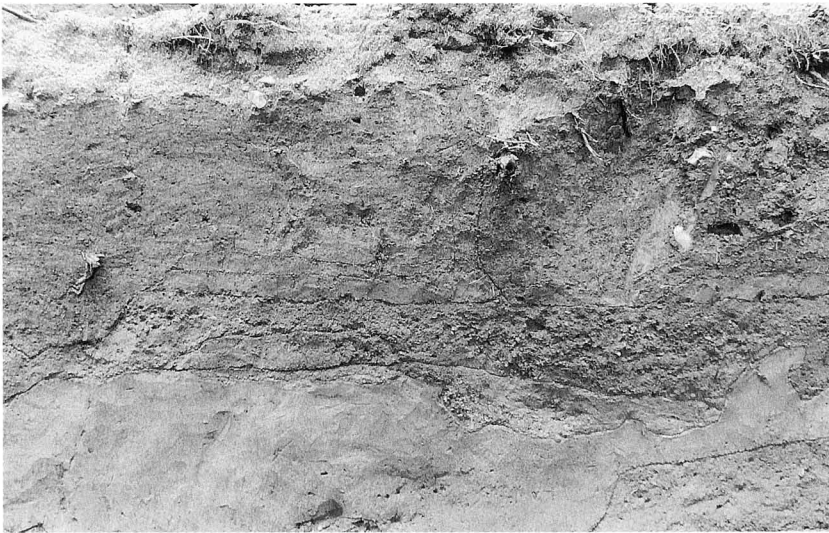
1 第八層上面遺構完掘状況②（北より）



2 第八層上面遺構完掘状況③（東より）



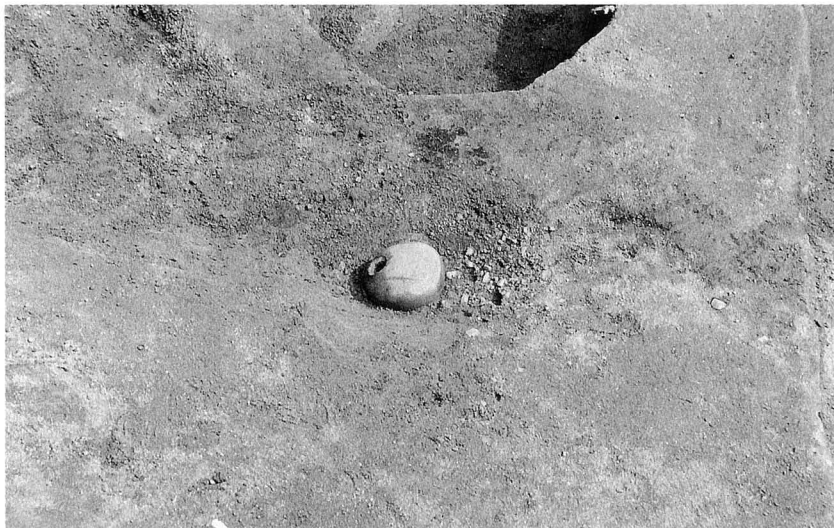
1 西壁土層（東より）



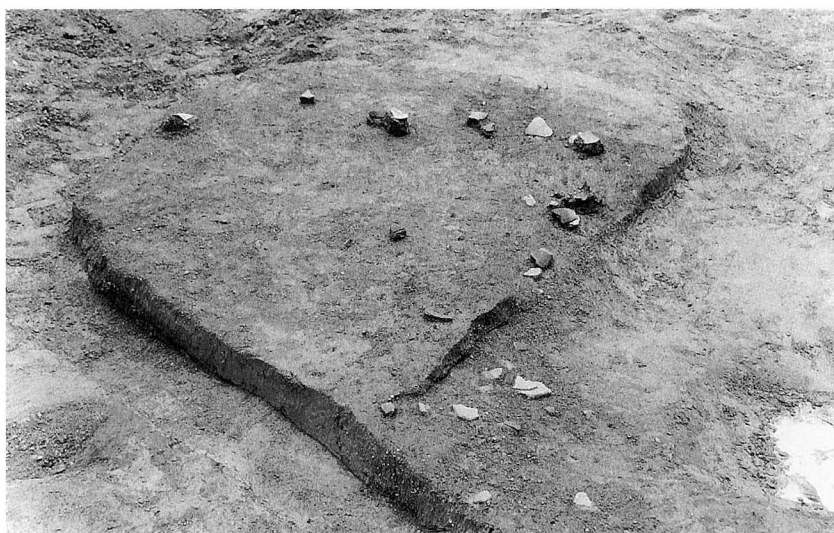
2 北壁土層（南より）



3 東壁土層（西より）



1 SR2 遺物出土状況（北より）



2 SR4 遺物出土状況①（南より）



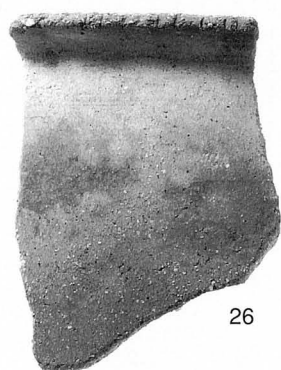
3 SR4 遺物出土状況②（北より）



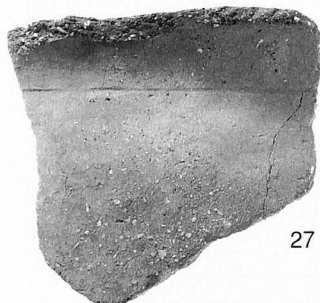
20



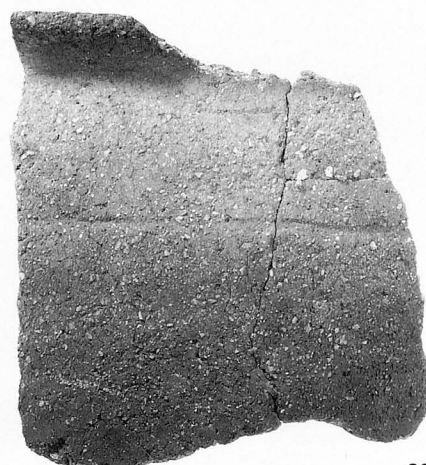
22



26



27



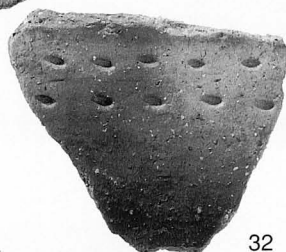
28



29



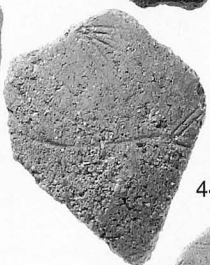
31



32



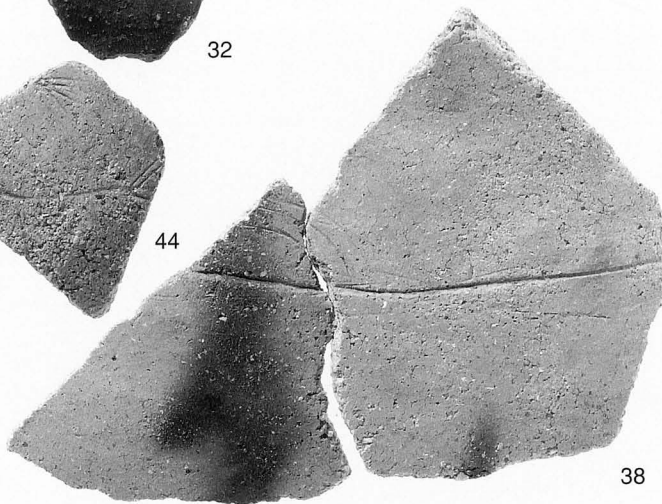
39



44

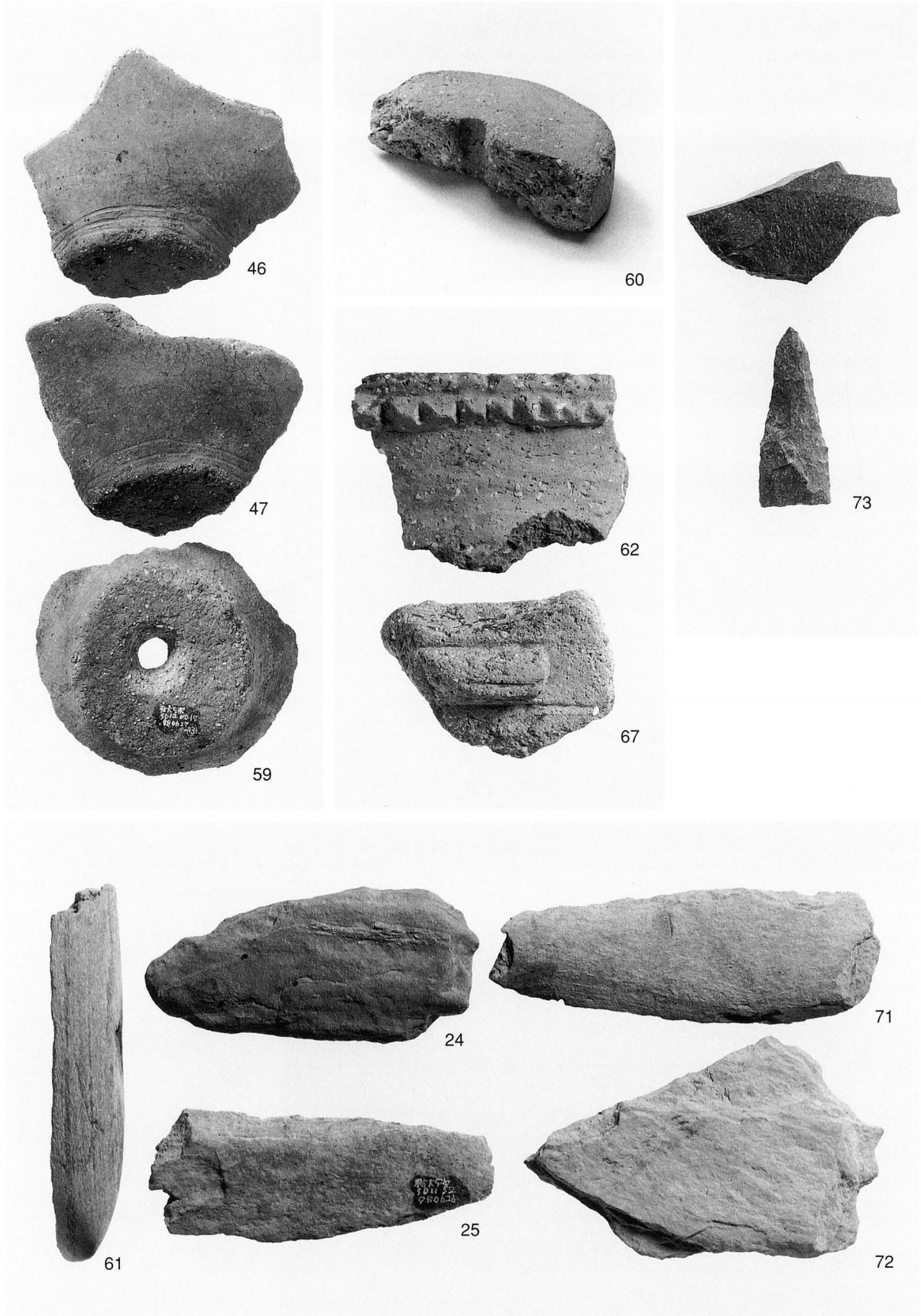


42

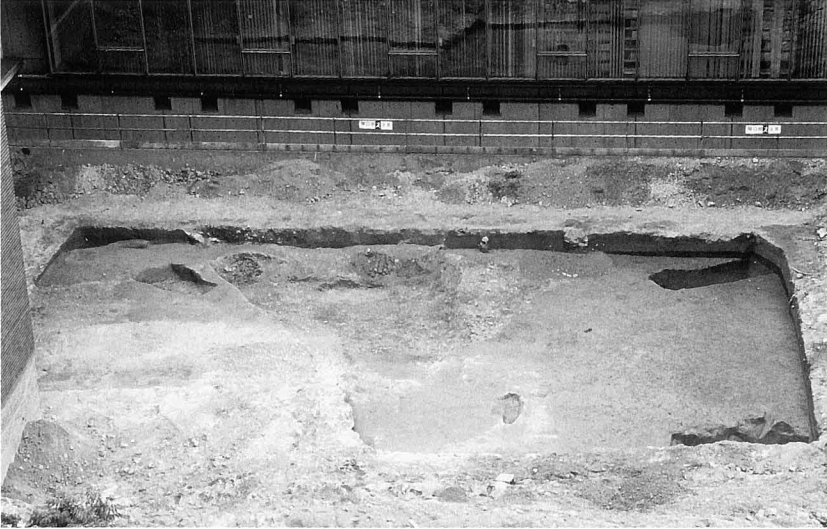


38

1 SR 2 出土遺物(20・22)、SR 4 出土遺物(1)(26~29・31・32・38・39・42・44)



1 SR 4 出土遺物(2)(46・47・59～61)、包含層出土遺物(62・67・71)、近現代坑出土遺物(72・73)
SR 3 出土遺物(24・25)



1 完掘状況（北より）



2 SR1 完掘状況（西より）



3 西壁土層（東より）



1 A区完掘状況①（北より）



1 A区完掘状況②（西より）



2 B区完掘状況（東より）



3 C区完掘状況（西より）



1 D区完掘状況（東より）



2 SE1完掘状況（北より）

報告書抄録

ふりがな	まつやまだいがくこうないいせき							
書名	松山大学構内遺跡Ⅲ							
副書名	4・5次調査							
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第68集							
編著者名	梅木謙一・宮内慎一・水本完児・(株)古環境研究所							
編集機関	松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	市教委：〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL 089-948-6605 埋文：〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 TEL 089-923-6363							
発行年月日	西暦 1998年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。′″	東経 。′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつやまだいがくこうない 松山大学構内 4次調査地	まつやましぶんきょうちょう 松山市文京町	38201		33° 50′ 51″	132° 46′ 09″	19940620～ 19940630	372	図書館書庫建設 ※試掘調査
まつやまだいがくこうない 松山大学構内 5次調査地	まつやましぶんきょうちょう 松山市文京町	38201		33° 50′ 51″	132° 46′ 09″	19980403～ 19980630	315	温山会館建設
みゆき 御幸	まつやましみゆきにちようめ 松山市御幸2丁目	38201		33° 51′ 22″	132° 45′ 56″	19970801～ 19971014	730	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松山大学構内 4次調査地	集落	古墳	自然流路	須恵器				
松山大学構内 5次調査地	集落	縄文～中世	溝、土坑、 自然流路	弥生土器、須恵器、 土師器、石庖丁				
御幸	集落	中世	井戸	弥生土器、須恵器、 土師器				

松山市文化財調査報告書 第68集

松山大学構内遺跡Ⅲ

－ 第 4 ・ 5 次 調 査 －

平成 10 年 9 月 30 日 発行

編 集 松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町 6 丁目 6 - 1
TEL (089) 9 4 8 - 6 6 0 5

発 行 財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地 6
TEL (089) 9 2 3 - 6 3 6 3

印 刷 原印刷株式会社
〒791-8014 松山市山越 4 丁目 8 - 15
TEL (089) 9 2 4 - 8 8 2 3
